同窓会誌

第10号

沼津工業高等専門学校同窓会

昭和60年

目　　次

沼津高専は今……学校長　慶伊富長……2
会誌10号によせて……会長　柘植宗康……4
同窓会の意義……副会長　久保田悦郎……5
事務長雑感……事務長　工藤勝次……6
退官教官だより……朝比奈博……7
森昭彦……8
同窓会によせて……事務部長　井上英世……9
電気工程科　柳瀬晴海……9
工業化学科　小松弘昌……10
M12　西田友久……11
M14　井上聡……12
母校創立20周年を終えて……E1　漆畑豊……13
東京支部紹介……14
近況報告……M2　原川実……16
M2　細井道泰……17
E2　深見幸輝……18
M3　田中信博……19
C2　泉克幸……20
M6　石黒俊一……21
M7　土屋京太……21
M9　井澤庄次……22
M11　長沢敦……22
M12　小池伸二……23
M13　山田武久……24
C9　中瀬裕子……24
M15　白花良治……25
E15　村松正広……25
M18　澤田清……25
第22回東海地区高専大会総合成績表……26
水泳部　柔道部　体操部　バレーボール部
慶弔報告……M3　岡本惇……31
M6　羽田壽夫……31
C9　中瀬道行……32
編集後記……32

沼津高専は今

学校長　慶伊富長

同窓会誌を通じて皆様にご挨拶する機会を得まして欣快に存じます。沼津高専を取巻く教育界の動きや、沼津高専自体につき感じておりますことなどを申し述べ、同窓諸氏のご理解をいただくとともに、何かとご声援をいただきたいと思うのであります。

高専に関する新聞報道が昨年はことのほか多く、にわかに高専が喧伝されはじめた感があります。これは、中学校における暴力問題に端を発し、教育臨調に集約された戦後教育の見直し論と無縁ではありますまい。戦後の6・3・3・4制への批判として、従来は傍系、しかも細々とした傍系と見られてきた5年一貫制の高専が、成功例として引き合いに出されたということも出来ます。事実、こういった見地から採り上げられた記事が少くなかったと思います。しかし、実際、引き合いに出されておかしくないだけの成果を、高専があげてきたわけであります。「産業界の評価にくらべ、社会的認識が不足している」と、高専校長会議（国立高等専門学校協会「高専の振興方策について」）が慨嘆したのは、ほんの3年前でありました。事態は急據好転の感があります。

新聞に多く採り上げられたことは、悪い気持ではありません。それなりに同窓諸氏も喜ばれたことと思います。しかし、このような認識の昂まりが、高専に対する社会的認識として立ち現われる—すなわち、具体的な社会的評価として現われることがなければ、単なる6・3・3・4制の攻撃材料に使われたに過ぎないことになります。

高専の評価は幸い、具体的な社会的評価として直ちに現われました。ご承知のように、18才人口は現在、急増期に入り67年度にピークを迎えます。（150万から200万以上に）。文部省はこれの対策を、かねてから大学設置審議会に諮問し、設置計画分科会が審議に当っておりました。策定作業は同分科会の専門委員会（主査天城勲氏）が担当したのでありますが、専門委員会は実情聴取の第一回に高専を選びました。3人の校長が意見を述べたわけですが、はからずも私は、その一人に選ばれました。策定作業は昨年10月に終り、審議会は「昭和61年度以降の高等教育の計画的整備」（中間報告）を発表いたしました。そのなかに、18才人口とは直接関係のない高専が、大学院とともに採り上げられました。すなわち、

「特色ある高等教育機関としての高専は発足以来着実に発展し、5年一貫教育の特色を生かした高等教育機関として定着した」と評価したうえで、「産業界の強い要望からも、高専を拡大充実すべきである」と提案しております。そのうえ、「このような高専組織を工業以外の他の分野に拡大することも考える必要がある」ことも提案されました。

18才人口の急増対策とは直接関係がない高専が、大学院とともに採り上げられた理由は、全高等教育の今後15年間の推移を見通すなかで急増対策が練られたためであります。しかし、それにしてもこれほど大きく採り上げられたのは、高専がきわめて高く評価された証據であります。

さて、この中間報告を受けた形で、大学設置審議会の他の分科会が、それぞれ審議を開始しました。高専分科会は永らく開店休業状態でありましたが、新しい委員構成によって昨年10月から、「高専の振興充実」のための具体的方針を審議し、本年7月末「高専の振興充実について」の中間報告を発表しました。私は数年来、基準分科会のメンバーでありますが、高専分科会の再発足とともに後者の委員を兼任し、この中間報告策定に参画いたしました。詳細は省略いたしますが、要するに電子情報・バイオ・材料分野等の学科増、商船高専の一部転換、それと教員人事交流などの方針が提案されております。各方面の意見による修正を加えて、明春あたりには最終報告が発表されるでしょう。文部省は、報告された方針を実施するための予算措置を講じてゆく段取りとなるわけであります。

沼津高専はいかに在るべきか、が今後の最重要課題となります。静岡県では、中学卒業生は5万名から64年度の7万名に向けて急増いたします。ご承知のごとく、静岡県は大学生受入れ定員がきわめて少い県であり、大学生収容率としては全国の下から3番目です。静岡県の下には三重県と滋賀県があるのみです。これら2県には通学圏として名古屋と京都がありますが、静岡県は対応する学園都市を欠いております。とくに、静岡県東部は、おそらく全国一の高等教育過疎地域かと想像されます。このため、沼津高専は労せずして優秀な中学卒業生を採用することができてきたといえましょう。沼津高専をとりまく産業環境は、ご承知のごとく大企業群であります。このため、地元定着型の卒業生といえども、優秀な企業に就職しております。先端的中小企業は高専卒業生を渇望しながら採用することが出来ません。このような状況が特に顕著に現われているのが沼津高専であると思われます。中学卒1万名あたりが全国各県の平均であり、各県それぞれ静岡県以上あるいは同程度の高等教育機関収容学生数を持っております。したがって、沼津高専は拡大せざるを得ないと思います。国家財政窮迫の折柄、理想と現実は大きな距りを露呈するでしょう。しかし、方向はきわめて明らかであると思うのであります。

沼津高専の内側にこんどは焦点を当ててみましょう。創立以来、20年を経過しました。20周年記念行事は同窓諸氏の大変なご後援によって盛大に行われました。樋口先生が仕上げられた大きな区切りでありました。学校とともに在り、諸氏とともにここまで沼津高専を育てられた創立以来の先生方も、いよいよ定年を迎えられるお齢となりました。市川良輔先生の直筆は校内各所に掲げられております。新しい尚友会館に入られれば一目瞭然であります。「足跡は残らないが手跡（筆跡）は残りますョ」と校長は強引に市川先生にお願いいたしました。先日、突然、富田名誉教授が逝かれました。かねがね、富田先生は自作を寄贈すると仰言っておられまして、最後の大作の題を市川先生に依頼され「希望」とされました。ご遺族の方々のご好意による大作「希望」が、近日校内において、現沼津高専生を鼓舞することになります。多数の先生方がこうして現役を退かれる時期にさしかかっておられます。そしてかつてお若かった先生方が、いよいよ中堅としての責任を負われる時期になってきました。同窓M1の柳下福蔵氏が教授となりましたし、卒業生（M12西田君、M14井上君）も続々と教壇に立っております。教育、研究設備も年輩の先生方のご努力で蓄積されました。卒業研究も高度化し、そのなかで大賀先生が本年機械学会論文賞を受賞されました。この賞は大変権威があり、東工大の機械系の全教授のうち2、3人しか受賞しておりませんでした（私の在職当時）。松平教授一門の研究、小松教授の反応蒸留、巻口教授の大労作「英国的発想法の研究」などなど、大盛況であります。「沼津高専は特別である」とも言われますが先生方の評判は高く、若松教授（大学共同利用研究所「放送教育開発センタ」教授へ）、北守助手（長岡高専助教授へ）のお二方が栄転されました。

このような活況のなかで、優秀な卒業生が巣立って行きます。本年卒業生のなかにも、2年間かけて見事なコンピューターグラフィックで、斯界を湧かせたI君が居ります。こういったことは、5年制一貫教育の大いなる成果の現われと思います。水泳部の主将をやり寮長をやったS君や、先生方の手もやかせたが立派に就職して評判の良いH嬢などなど、半年授業でつき合った卒業生諸君の顔が忘れられません。ただ、少しく運動部が往年の勢いに欠けるところが見られます。それも、本年は、久し振りに2桁の代表学生を全国高専体育大会に送ることが出来ました。〝勉強の出来る学生は何でも出来るはずだ〟と私は信じております。

おわりに皆さんのご援助を大いにお願いしたい点があります。それは、教育内容とか学生生活に関する先輩から見た場合のご忠言をいただきたいことであります。教員側は絶えずカリキュラムの検討その他に努力は致しております。ひとつ、先輩側の忌憚ないご意見をいただきたいと思います。幸い、同窓諸氏が帰校（ホームカミング同窓の集い）されたとき、市川良輔先生直筆の校歌が掲げられている尚友会館がお役に立つはずです。近々、準同窓会員の内田晴之氏の美事な彫刻が玄関ホールを飾ります。この会館を大いに利用され、母校のためのご熱心な論議も闘わせていただければ望外の喜びであります。

会誌10号によせて

会長 柘植宗康（M3）

昭和59年度の主要行事である同窓会誌の発行作業も一段落し、ほっと一息ついているところです。

さて、沼津高専同窓会は、新しく18期生を加えて、会員数は2,500名を越えました。

この会員の増加に従って、同窓会の事務作業量も増加しており、今後いろいろ影響が出てくるものと予想されます。

同窓会での主な事務作業をあげますと、同窓会誌、同窓会だより、総会開催通知、理事会開催通知の発行と、それに先立つ会員名簿の整理等です。

理事会の回数をふやすのにも限度があり、これらの作業を効率よく処理する方法を考えていく必要があるでしょう。たとえば、百人近くいる理事への理事会開催の連絡は、以前は電話連絡でしたが、前期から葉書による通知に変わりました。葉書では事務的過ぎる面もあり理事会の出席人数にも影響が出るとも考えられますが、やむをえない処置だと思います。

次に会員名簿の整理でありますが、現在の名簿は創立20周年記念の同窓会名簿の発行のため、多くの人手をかけて整理しましたので、かなり良い状態であると言えます。この名簿発行に使用した、名簿の原稿のフロッピーが手に入っていますので、これの有効利用を検討してみたいと思っています。

名簿の現在の状態はできる限り維持してゆきたいと思いますが、会員のみなさまには、住所が変ったときの変更通知を忘れずに同窓会事務局宛出すように心掛けていただきたいと思います。住所変更通知を出さないで、転居した場合、同窓会側で、その人が住所不明となったことに気づくのに1年近くの時間がかかることがありますので、この点は是非心掛けていただきたいと思います。

以上事務的な話題に終始してしまいましたが、同窓会活動を支える基本的事項であると思いますので書いた次第です。これからの同窓会は、量との戦いという新しい問題も抱え込むことになりそうです。理事のみなさんにも、なお一層の御協力を御願いいたします。最後に今回の同窓会誌のために原稿を書いていただいた方々、および発行作業に御支援して下さった方々に厚くお礼申し上げます。

同窓会の意義

副会長 久保田悦郎（M15）

同窓会副会長という大役を引き受けて早半年が過ぎました。名簿の整理も着々と進み、同窓会誌の発行準備に追われる今日この頃ですが、ようやく同窓会の仕事に慣れてきた感じです。

私は卒業後、理事になっていたわけではありませんので、理事会の仕事や同窓会の目的について最初よくわかりませんでした。多くの人は卒業時に終身会費を払うだけで同窓会の意義についてはあまり考えないと思います。堅くなりますが、そもそも同窓会の目的とは、会員相互の連絡、親睦と母校との連絡をはかり工業技術振興に寄与することにあり、その為に　1)会員相互の連絡をとる　2)会員名簿の発行　3)会誌等の発行　等を主な活動としています。

私が同窓会について思うに、先ず、卒業後も旧友と連絡がとれ色々な話が出来るということは本当に素晴らしいことではないですか。

卒業と同時に、友人達は全国に散らばり、海外に行っている人も多いのではないかと思います。異なる土地に住み、違う人生を歩んでいる人の生活や考え方を知ることができるということは貴重なことだと思います。

また、同窓会は各会社間の情報交換の場でもあると思います。

例えば、各会社には高専卒業生の会があるのではないかと思います。

国産電機にも空津会と称する高専卒業生（沼津7名、大分1名）の会が有ります。発足しまだ一年足らずですが、一杯会だけではなく、会社内での諸問題を話し合っています。最近も高専卒の賃金問題について議論しました。

各会社のこの様な会での催し、話題、問題等を会社の外にも広げて行ければ更に良いと思います。

それともう一つ、沼津高専も開校20周年を経過しましたが、一般には馴染みも薄く、高専に対する誤解も多いと思います。同窓会としても、それらを少しでも取り除いて行ければ、卒業生、在校生にとってプラスになる面は多いと思います。

最後に今回同窓会誌発行に当たり、原稿依頼に応じてくれた先生方、会員の皆様、発行準備に協力してくれた理事の皆様、どうも有り難うございました。

事務長雑感

事務長　工　藤　勝　次（C9）

沼津高専同窓会は着実に進展しております。一重に人柄のよい同窓生諸氏の御協力の御陰であり、又名誉ある役員を経験させて頂いていることに感謝しております。

はや任期の¼が過ぎ、59年度最重点行事である本同窓会誌第10号を無事に発行でき、これだけで満足してはいけないのでしょうがホッと一息といったところです。なにぶんにも事務長が怠慢な為、「母校創立二十周年も終えたことだしのんびりやろう。」と地道な息の長い活動を心掛けることにしています。

59，60年度は、目新しい計画はなく、例年の行事を遂行することで活動を継続させていく子定です。それだけに同窓会本部としてもより充実を計ることが可能な時期であり、地元の理事を中心に、以前からの課題となっている次の内容に可能な限り、手掛けていきたいと考えています。

1．同窓会名簿、保守方法の改善
名簿を始めとし、会員の情報に対するコンピュータ利用は、着実に推進されており、今後より充実したものとなっていくことでしょう。

2．人材不足、理事への個人的な負担の低減
同窓会本部の主構成員である、地元の理事の方々が、積極的に活動できるよう、特に理事会への出席がない為に、住所録などの管理が滞っている期の代表に参加を呼び掛けていくつもりです。

3．支部活動の一層の充実
会員数も既に2,500人余りとなり、各地域に本部を脅かす程に充実した、たのもしい支部が発足されてきています。次回の同窓会誌は、どこかの支部に編集を依頼してもよいのではないのでしょうか。本部としても各支部に対し、その活動の援助等、考える時期になってきております。

4．総会に対する出席率の向上
母校の高専祭に合わせ、現在、2年毎に同窓会総会を開催しております。ところが、卒業年度の古い会員の集りが悪い為このことが次回の出席率を低下させるという悪循環になっています。この現象を避ける為に、同窓会本部或いは地元の理事を中心に、ある卒業年度だけに的をしぼってでも声をかけあい、有意義な場を作るべきだと思います。

5．同窓会用事務室の確保
50周年記念までには、是非同窓会館の設立をと気の長い夢を語る前に、物置きすらない現状を少しでも改善する為に、学校側に、事務室或いは物置きを建てる敷地の提供をお願いすべきです。

昭和59年度、60年度事務計画及び中間報告

昭和59年度

6月2日	新旧三役引き継ぎ
7月6日	三役、理事、顧問親睦会
8月24日	第1回三役打合せ会（会誌）
9月7日	第1回理事会
9月14日	第2回三役打合せ会
10月5日	第2回理事会
10月15日	第3回三役打合せ会
11月21日	卒業予定者への説明
1月6日	第3回理事会
2月15日	第4回理事会
2月20日	同窓会誌発行
3月	卒　業　式

昭和60年度

5月	三役、理事、顧問親睦会
8月	理事親睦球技大会
11月	総　　会
12月	同窓会だより発行
12月	卒業予定者への説明
3月	卒　業　式

退官教官だより

◆一つの結び—心の支え

朝比奈　博

同窓会の皆さん、しばらくでした。

今年の夏は異常な猛暑でしたが、お元気でしょうか。今回は、会報誌上にてお目に掛らせて頂きます。退官した教官は、大体順番に同窓会報に何か便りを寄せる習わしのようで、今度はこの僕にお鉢が回ってきた訳です。

指折り数えてみると、高専を退いてやがてもう4年に近く、まこと〝光陰矢のごとし〟です。ところが僕がまだ高専で教えている、と思ってくれている卒業生が何人かおるのを過日も偶然に知り、くすぐったいような嬉しさやら、何かしら切ない寂しさやら錯綜した心地です。——それはまあともかくとして、お陰さまでまずは健康にて消光、早く〝恍惚の人〟たらぬよう、ボケ防止のために、頭と足の鍛錬にも懸命これ努めていますから……

「定年退職」といえば、世間一般ではどのようにこれを感じ取っておるのでしょうか。まだまだ若い諸君にとっては、そんな論議は全く無縁の長物として意に介せぬ他人事だ、とこれを斥けるでしょうが、大体約束の予定期限まで元気に勤め終おせたのであるから、まずは「満願成就」というべく、目出たい人間事象だとして受け入れていることでしょう。しかし、実際に身をもって経験してみると、必ずしもそうした向きには参らず、当時の自分を顧みてもなかなかなれない境地だった。—もうあと1年→半年→3カ月→1カ月と、ジワリジワリ日限の迫って来た頃を思い出すと、何とも息詰まる嫌な思いである。新陳代謝が世の常であり、それがまた自然の理なることぐらいは百も承知しつつ、何ともすっきり得心されず、結局最後は諦観に終止せざるを得なかった。所詮それは「体のいい首切り」であるし、〝生殺し〟も同然、あたかも屠牛場に引かれゆくものの哀れささえ覚えたものでした。

だが、何年か経った現在は、と言えば——よくもまあ、毎日3つの国鉄線を乗り継ぎしては、片道1時間以上も要する距離を、20年近くも通い通したものだ、と我ながら感心したり、こんな事だったら一層のこと、もっと早く辞めてもよかったのに……など、甚だ天の邪鬼的へそ曲がりの心境である。と言っても、決してそれは負け惜しみ的心情からの言い訳ではない。というのも、今は誰からの強制も圧迫も受けず、とかく煩わしい人間関係の絆にも巻かれることなく、心の欲するまま、好きな仕事や勉強もまた自分の好きなようにやれる現在の境遇が、世に言う〝晴耕雨読〟とか〝悠々自適〟には程遠いにしても、一番さばさばとした気楽さ、屈託なさ、と言えるのではないだろうか。

ここで是非一つ事後報告をしておかなければならぬことがある。——まだ僕が在職中の同窓会報（S55年度）に、初期卒業生のT君や同じ会社のO君たちと、たまたまある年、ある夏の一夕に親睦の集いを持ち、往年の交情を温めたことがあり、そのことが退官を目前にした僕の心を妙に揺さぶり、しみじみとした一杯を味わった感慨を一文に草したことがあった。そして「もし退職後、折々にでもこんな結び合いの楽しさが得られたとしたら、どんなにか〝教師冥利〟に尽きる思いに感謝することであろうか——」と、大体こんな要旨のことを書いた記憶が残っている。

ところが、そうしたささやかな願いが、実は自発的にとうとう本物化し、その同じT君・O君らが世話役となって、早速会社内の同窓同志に働き掛けて賛同を得、今では会則規約まで設けられた立派な一つの親睦組織が出来上がっていること、そしてその翌年から運営を始め、昨年は新卒入社員の歓迎会を、また今年の春は数えて4回目の懇親の集いを開くまでに至っていることをお伝えしておきたいのである。因みに同会の名称は、名付け親を頼まれて『沼津高専・いなづま会』（注「いなずま」は不採用）、会長はもちろんT君、そして会員数は目下のところほぼ20名の小世帯で、同窓会の超ミニ支部といったところ。同じ社内でも各地の支店・営業所に職場が分散しておれば、滅多に顔合わせの機会もなく、それがたとえ年に1度の定期集会だけでも、先・後輩を通しての互いの意思疎通、情報交換、さては協力支援の契機ともなり得る貴重な役割りは十分果たせるであろう。

単に同窓出身関係というだけの一面的意識を超えて、もっと幅広く、柔軟闊達に、一個の独立した対等の人間関係高揚の場として、こうした集い、結び合いの試みを、他の事業所の複数OBの皆さんに、是非ともPR推奨したいものだ、と僕は考えている。それには誰か一人でも進んで代表となって一肌脱ぎ、献身的に肝煎る篤志と厚意とが必要だと思うし、そのこと自身何よりも、お互い社会人として強く明るく生きて行く上での勇気付け、励ましともなり、また小さくとも心の支え、生き甲斐の一つのしるしたることを固く信じているからである。

（住所）〒418 富士宮市大宮町6—17

物理実験室の８年

森　　昭　彦

（現在　人事院次席試験専門官）

３階の日当りの悪い、冬はおそろしく寒く、夏は風通しの悪い、あまり住み心地の良くない室で過ごした８年間であった。しかし、そこには筆者の32歳から40歳に至る、人生の最も充実期の消し難い思い出が数々ある。

赴任早々に、黒一色の制服の集団を前にし、自分もかつては、大学を出るまで学制服を愛用していたのも忘れ、極めて奇異な感じを持ちながら授業を始めたのを未だに覚えている。

学生諸君に向かって話す言葉が、こちらの意気込みとはうらはらに、空気に吸い込まれていくように感じ、易しい事を教えるのは何て難しいんだと、つくづく悟ったものである。

そんな筆者にとって、赴任後しばらくして参加した、全国国立高専の新任教官研修において語られた事は、実に新鮮な驚きであった。即ち「学生が授業を理解できないのは、教師の責任であって、学生の責任ではない。」という事であった。これは大変な命題であって、もしこれが完全に実践されれば、昨今の学校内暴力や少年非行など、そのほとんどが起こり得ないはずのものである。またこの実践は教師に大変な努力を要求するものである。しかし、ともかくもなるほどと思わせるものであって、それから完全習得学習を目指しての悪戦苦闘と試行錯誤が始まったのである。

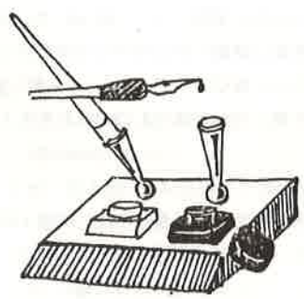
まずは、１、２年生の学生実験のシステムをすっかり変えてしまった。それまでの基本計測技術中心から、学習内容の理解を進める為の実験へと切替えたのである。またグループごとの順回実験から、実験道具の整備に従って、授業の流れに沿った一斉実験へと変化させたのである。

この変更は、実験項目が減少したことと、実験（計測）技術の基礎の習得の面がおざなりになるという欠点を持っている。後者に関しては、一般教育科目としての物理においてではなく、専門教科目の一環として、各専門学科と、物理が協力して、専門基礎科目として基本計測を中心とした工学基礎実験というようなものが設けられないかと構想していた。がそのままで終ってしまった。

実験形式の変更と共に、授業においても、ＯＨＰ、16㎜フィルム、ループフィルム、ＶＴＲ、スライド等と視聴覚器機を動員し、またデモンストレーション実験をできるだけ行いながら、学生諸君の興味を引こうと必死の努力を行ったのである。プリントノートの作成も同主旨からであった。これらの成果については、筆者の授業を受けた諸君が最も良く判定し得るであろう。筆者としては前述のように試行錯誤の連続であった。失敗した時の被害者はすべて学生諸君であったから、ずい分迷惑をかけた事であろう。完全習得学習などは遠い夢だったのかもしれない。しかしながら、何か一つくらいは物理のおもしろさを掴んでくれなかったろうか。なお、実験の整備、デモ実験の準備、教材やプリントノートの作製には、芹沢技官の実に献身的な協力があった事を書き添えておく。

さて、筆者の今の仕事は、国家公務員採用試験の問題作成が中心であるが、実はここでも、高専問題に直面している。従来、中級試験といわれるものは、短大・高専卒者を主たる対象とした試験であったが、（実際は大卒の合格者が技術系で85％を占めるため）来年度からこれを廃止し、新たに大卒程度の試験を上級試験とは別に設ける事になった。但し従来の中級試験での高専卒者が合格者の15％を占める実績に鑑み、高専・短大卒又は卒見でも受験資格を認め、出題分野も、大学と高専のカリキュラムの共通部分から出題という事になった。そこで筆者の悩みの種は、出題水準をどうすれば、従来の高専の合格率を確保できるかという事である。土木を除いて高専は公務員にあまり魅力を感じていないようだが、沼津を含めて、各高専がエースを送り出してくれれば、筆者の悩みなど簡単に吹きとんでしまうであろう。実は技術系の就職状況が極めて好況なため、公務員として優秀な人材の確保に日夜頭を悩ましているのが現状である。

何やらとりとめのない話しになってしまったが、編集委員氏の御希望に添えたでしょうか。



同窓会誌によせて

施設の面から見た沼津高専

事務部長　井　上　英　世

国立高専は、昭和37年度に12校（いわゆる37年度校）がはじめて設置され、その後逐年増設されて、昭和49年までに工業高専が46校、昭和42年に商船高専５校、46年に電波工業高専が３校、合計54校が現在設けられている。わが沼津高専は第１期の創立で、今年で創設後22年となったわけであり、年々優秀な卒業生を世に送り出して来ている。

この本校の歴史を施設面から見ると、勿論大きな進展をとげて来ている。昭和37年度の創設時には機械工学、電気工学の２学科が置かれ、昭和41年度には工業化学科が新設されて現在の３学科４学級となったものであるが、創設当初の仮校舎は別として初年度およびそれ以降に出来た建物面積（延）を５年おきに集計してみると、

昭和37年度	3,727㎡
〃 42年度まで	17,263㎡
〃 47年度まで	24,201㎡
〃 52年度まで	25,015㎡
〃 57年度まで	27,308㎡
現　　在	28,048㎡

となり、創立時より著しく増加している。

最近の大きな工事としては、

昭和54年度	第２体育館	880㎡
〃 56年度	新校舎（第２講義棟）	665㎡
〃 57年度	生活廃水処理施設	
〃 58年度	福利厚生施設（尚友会館）	724㎡

がある。

勿論建物の増加のみでなく、環境の整備、運動場、プール等の体育施設、配管系統のいわゆる基幹整備などの設置がこの間大いに進んで来ている。

同窓会の皆さんは、それぞれの時期に本校で学んだわけであるが、初期のように不便な施設にたえて来た方々や、年々充実して行った時期に在校した方などいろいろな思い出があろうかと思う。高専は人間性豊かな技術者を養成するところであり、そのためには学校環境の良否は大いに願って力があるものと思うが、特に本校のように１・２年全寮生であって、３年以上にもかなり寮生がいる学校では大事なことである。

朝夕富士の秀峰を仰ぎ乍ら学ぶという絶好の地であっても、生活の場である学寮が味気のない所であってはならない。本校では近い将来寮を拡げる計画をもっており、また少しでも寮生諸君の生活の場を住みやすくするよう検討が進められている。

現在本校の１・２年生は全寮制であるといっても、女子学生は除外されている。然し本校の特色の一つは「低学年全寮制を主軸とするカレッジライフを通じて、全人格教育を行う。」となっており、また実際上遠距離通学の女子学生は非常に不便である。このことから近いうちに女子寮の新設（改装による。）が行われる予定であり、入寮後は円滑な運営が期待される。

学校施設は、教育、研究の場としての機能を十分に備えていなければならないが、また学生諸君の生活の場として快適である必要があり、さらに文化的環境というようなものが備わっていることが望ましい。高専の場合、従来ややもすれば、そういった面には欠けているようであったが、今後は出来るだけ環境の美化に心掛け、教育・研究と生活の場としての豊かな施設とせねばならないと感じているので、同窓生の皆さんも是非御意見等をお聞かせ願いたいと思うものである。

思い出すままに

電気工学科　柳　瀬　晴　海

卒業生諸君、大活躍のことと思います。学校も18期生をこの春におくりだし、創立以来22年経ちました。

先に刊行されました〝20年史〟の〝本校の歩み〟は〝社会の動き〟と並行してのべられており、今一度振りかえって読んでみてはいかがかと思います。私が奉職したのは昭和38年４月で〝あ〜〟という間に21年余の歳月が流れ去ったという感じです。この年の３月には金岡中学校の仮校舎から現在の大岡に移転という事で参加したことを憶えております。その折に、それ迄一度もあった事のない学生（当時の１期生）が極めて礼儀正しく相談といいますか、話しかけられその雰囲気からかもしだされる感じがよくて、そのわけがすぐには納得できませんでした。

しかしその後、授業、実験、クラブ活動等を共にしてみて、井形校長の教育方針のあらわれであったかと思いました。実は個人的のことで今迄殆んど話した事はないのですが、金岡の高専創立当時の仮校舎に初めて来たとき、私はその敷地がかつて戦時中は海軍工廠の一部で

あった事を思い出しました。といいますのは、昭和20年頃には私は海軍技術士官として沼津海軍工廠に配属され〝零式戦闘機の無線機〟の製造に従事していまして、仮校舎はその時の建築物の一部であったことを思いだしたからです。〝沼津と私〟という題になりそうですが、昭和20年に戦争が終り、また38年から沼津に勤務するとは思いませんでした。私の人生の約⅓は沼津で過ごしたことになります。

さて大岡の新校舎は当時管理棟しかなく、自然林（原始林？）に囲まれておりました。あれから22年、人と物の転変はありましたが、校舎の増築等と共に実験室も整備され、教師、学生共に機器を運搬したり、据えつけることを手伝ったり、まさに充実した日々でなつかしい事です。そしてすべてが新しかったです。

私は毎日ギコギコと自転車に乗って21年余りを過ごしましたが、その道通りは毎日少しずつ変化があったわけで、移り変わりはその年々の写真やスケッチ帳を帳りかえってみて、あの時はこうだったのかと思う次第です。

変わらないのは自然です。富士はいつ見ても美しく、空は青い。それぞれ季節によって変化はありますが、私は春の愛鷹と冬の赤富士が好きです。

今迄にも、校舎の増改築やグランドの整備等が行なわれてきましたが、本年〝尚友会館〟が完成されました。研修、クラブミーティング、また食堂等に使用されておりまして、来校の節は是非立ち寄ってください。

今の学生は恵まれているという事を感ずると思います。

つぎに、同窓会員も約2500名となり、充実していることは他高専にも知られております。卒業生は夫々社会人として立派につとめておられますが、これからの新卒業生にはどの職場においてもあたたかく、また一面きびしく先輩としてむかえてやって下さい。先輩、後輩のつながり、同級生間の親しみは社会生活に必要な事です。

学校時代には同じ寮で生活し、同じグランドで走り、同じ……共に過ごした〝大きな仲間〟を忘れないで下さい。

さて、話はかわりますが、先日静岡のＴＶで静岡県の今後の産業についての事を聞きましたが、御承知の通り西部のテクノポリスと共に、沼津、御殿場を中心とした県東部の今後の充実については非常に発展性が高いという事です。その理由として、有利な点は東京から一時間とか、よい自然環境の点や各一流メーカーの進出等です。

しかし今後の問題としては、道路の整備とか、国際会議の施設の不足とか等いろいろあげられておりました。

この地域内にわが沼津高専があり、当然工業教育機関の中心になってゆくと思います。卒業生として協力していただきたいし、大きな立場から本校の拡充発展をみてやって下さい。

まだ、思い出されることは沢山ありますが、一応このあたりでおわりとします。

とりとめもなく書きましたが、いずれまた。

〝毎日をお元気で!!〟

新任教官協議会に特別参加して

工業化学科　小　松　弘　昌

この8月28･29日の両日、本校に於いて、新任教官研究協議会なるものが開催されました。これは文部省の主催によるものであり、昨年、東京高専が会場に選ばれる以前は、高専以外の施設で行われておりました。この2年間、高専を会場に選んだのは、全国62高専のうちで、東京と沼津が学生の実力、教官の研究活動、施設等の面で最優良校だからだそうです。これは多少の世辞かも知れませんが、文部省の技術教育課課長補佐の言でありました。

この協議会の2日目、班別協議会なるものがあり、それぞれ専門学科別の6班に分かれて、「現代学生と高専教育について」および「高専における教育･研究について」をテーマに討論が行われました。私は米子高専の教務主事茶原先生と工業化学科および航海科に赴任した教官のグループの助言者となり、討論に参加することが出来ました。

新任の教官の中には、高専卒業後、大学へ編入した者も若干おり、自分達の高専時代と現在の学生気質を比較して、感想を述べられました。皆様は沼津高専の卒業生であり、誰よりも高専についてはよくご存じの事と思います。

高専は創立20周年を過ぎ、教育方針、内容ともに確立されたと考えて居ります。その証拠には、企業側が高専卒業生に対する評価を高め、昨今では、求人倍率も十数倍にも及んでいることであります。また、大学側も高専生の編入学受入れを大幅に広げ、高専が袋小路だと言う印象も消えつつあります。全国平均では卒業生の約1割が大学へ編入学して居りますが、本校では卒業生の約2割に相当しますので、編入学の実績でも、本校は上位であります。

学生の質の低下、これは高専ばかりでなく大学でも問題とされているものでありますが、高専では専攻を中学校卒業の時点で決定する事が違って居ります。高専は5年一貫技術教育がその特色とされていますが、皆様の経験からどう感じられたでしょうか、一般には高校3年で大学入学という一つの区切があります。全国高専についての過去5年間の統計によると、3年次での退学者は全退学者の約44%、3年次での留年者は全留年者の約36%であり、その約54%が学業成績不良によるもので、3年次に中だるみの現象が現われております。これに対処するには学内でも方策を立てる必要がありましょうが、高専制度そのものの見直しにも期待したいところであります。

この7月、大学設置審議会の高専分科会で「高専の振興・充実について」の中間報告がなされました。この分科会には本校の慶伊校長が委員として参画されて居られます。この中間報告は、高専発足の経緯から始まり、高専の現状と概観、当面の整備方針および高専教官の人事交流等に亘るものであります。いずれ高専制度そのものが見直され、名実共に高等教育機関にふさわしい内容をもった高専となることだろうと期待しております。

この中間報告を踏まえて、新任教官協議会も高専の在り方にも議論が及びました。高専は地方に分散しており、地域社会へ技術面で貢献する必要もありましょう。そのために、公開講座の開催および産学官共同事業への参加等が考えられます。本校でも本年度、4つの公開講座が開かれ、多数の参加者を得て、好評を博しました。また、受託研究や共同研究も企業との間で数件が行われて居り、企業への技術協力に努力して居ります。

新任教官議会で出た意見は、我々高専に関係している教職員の意とするところであります。しかし、大学工学部卒業生約8万に対して、高専卒業生の数は約8千で、その約1割であり、世間に高専の知名度が低いのは事実でありますが、我々は高専の実質は高等教育機関として充分なものと自負しており、高専教官の仕事は研究・教育および学生の生活指導であり、その任務を通して、高専の評価を世間に、より高めることにあると考えて居ります。

本校の同窓会も発足後、17周年を迎え、会員も約2500名になり、活発な活動を続けられていることを大いに喜びとして居ります。皆様の尚一層の活躍を期待し、学外から、沼津高専の名を更に世に知らしめられますよう願って居ります。

同窓生および同窓会顧問の１人として

M12　西　田　友　久

昭和53年3月20日、第12回の卒業式を終え、寮食堂に於いて和やかな雰囲気の下で謝恩パーティーが行なわれました。終了時刻が迫るにつれ会場は大いに盛り上がり熱気が満ち溢れ、恩師・友人に握手する者、抱き合う者とさまざまで、誰しもが多少の不安と大いなる期待とを胸に秘めながら社会へ飛び立とうとしています。私も友人たちと肩を組み交しながら「時間を戻せるものならば、もう一度、高専生活を送りたい!!」と大声を上げたものでした。長いようで短かかった5年間の思い出がビデオの早送りのように次々と脳裏に甦ってきました。2年間の寮生活、友人との対話、教官の激励や叱咤、少林寺拳法部の創設、高専祭、etc。人はよく〝過去は時間の経過とともに全てが美化される〟などと言いますが、私の場合、決してそうではありませんでした。それというのも、恵まれた環境、尊敬できる先生方、先輩、友人、後輩があったからこそです。

時は経ち、私は長岡技術科学大学、東芝機械を経て、昭和57年9月1日、思い出多き母校に教官として舞い戻ることになり、同時に同窓会顧問という大役を仰せつかりました。それまで、同窓生でありながら同窓会の役割をほとんど認識しておらず、二カ月後に行なわれました20周年式典にも名ばかりの顧問として小さくなっていた次第です。しかし、大先輩でしかも同室の柳下教授を始めとする他の同窓会顧問の先生方に指導して戴き、また、都合のつく限り理事会等にも参加させて戴いたお陰で、最近ようやく同窓会の役割および理事の方々のご苦労がわかってきました。(同窓生として誠に恥ずかしいことではありますが…)

ここで、同窓生の皆様にお願いしたいことが2つあります。

一つは、同窓会の仕事に関することです。今年の3月、私のところに次のような電話がありました。「私は○期卒業の○○○○ですが、二週間前に同窓会名簿の代金を送ったにもかかわらず名簿が未だに来ないというのはどういう事なのですか？　代金を納めたらすぐ送るのが常識でしょう!!」と異常なまでの見幕で怒鳴るのです。そこで私は「名簿に関しては以前に一括して注文・発送を行ない、その後注文のある場合は、ある程度部数が集まった段階で発送するため、多少の遅れは出てくると思います。」と事情を説明し、ようやく納得してもらいました。同窓生への連絡等のため、名簿を早急に必要とすること

はわかりますが、実際、理事の方々は会社の仕事終了後、貴重な時間を割き、無報酬で夜遅くまで同窓会の仕事をしているのです。私のような若輩者が差し出がましいようですが、このようなことを理解し、理事の方々に協力して戴きたく思います。

もう一つは、クラブＯＢ・寮生ＯＢなどの立場から、在校生に少しでも多くのアドバイスをお願いしたいことです。それによって彼らはどんなにか元気づけられ、また、頼もしい思いをすることでしょう。

私も今後、卒業していく学生に気付いた点をしっかり説き聞かし、同窓会の運営が少しでも円滑に行なわれるように努力し、また、良き後輩の育成に全力を尽くす所存ですので、何卒よろしくお願い致します。

同窓会によせて

M14　井　上　　聡

本年４月より母校の教官として着任しましたM14の井上聡です。M1の柳下先生、M12の西田先生と共に卒業生の一人として同窓会の顧問をさせていただくことになりました。

恥ずかしながらこれまでの私は学生だったこともあってか同窓会の活動にあまり関心をもっておりませんでした。しかし、仕事が終わってから学校に集まり、名簿の編纂等の仕事をしている理事の方々の姿をまのあたりに見てこの同窓会の存在を強烈に印象づけられたような気がいたします。青春時代を共に過ごした仲間達、そしてその先輩・後輩それらを全て包み込んでくれるのがこの同窓会であり、いわば私達のもう一つの家のようなものではないかと思います。大学のような大規模な学校でもなく、かといって高校とも異なる独特のムードをもち、そして16〜20歳という最もエネルギッシュな時代を過ごした学校だからこそ卒業生の母校愛にも他校にはないものがあるのだと思います。卒業生が母校を訪れる機会の多いこと、20周年記念行事に対する関心の高かったことなどその表われではないかと思います。私が母校において社会人としての第一歩を踏み出すことになった時、自分の学生時代の学友の存在感がどれだけ励みになったかわかりません。仲間の存在感を機会あるごとに感じられる。とてもすばらしいことではないかと思います。また全国各地に多くの卒業生が散らばり、それぞれのところで活躍している。と、想像するのはとても楽しいことでもあります。まさに日本の工業の一翼を担っている。そのような感じを受けます。

この同窓会の存在は私達にとって計り知れない影響力があると思います。何故なら私達は沼津高専の卒業生なのですから。私達は先輩方の努力・精進のおかげで今日の学校そして自分達があることを改めて認識し、更に私達の努力により母校の発展に、後輩諸君の希望ある未来に寄与しなければと感じております。

なにぶん未熟者ではありますが今後ともよろしくお願いいたします。

〝母校創立20周年〟を終えて

Ｅ１　漆　畑　　豊

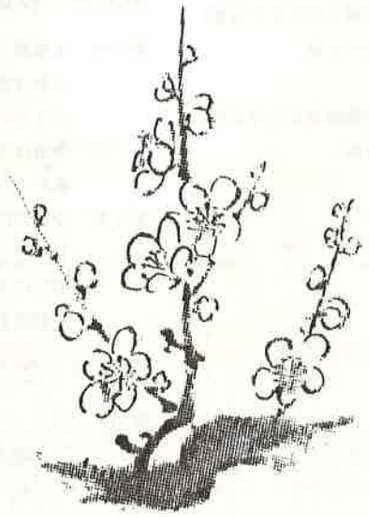
はじめに、母校創立20周年に際し、多数の会員諸氏より拠金の賛同をいただき、ありがとうございました。

この20周年の年に、同窓会会長の任にめぐりあえたことも、スレスレの成績で第１期卒の仲間入りさせていただいた私にとっても大変意義深いものでした。

さて、20周年事業に、学校、教育後援会とともに共催の形で参加することになり『同窓会』の実力が試されることになったわけであるが、無事20周年を終えることができたのも、同窓会発足から今日にいたるまで、先代々役員及び同窓会顧問教官の尽力で『沼津高専同窓会』の組織をガッチリ固めてきたたまものであると思います。同窓会設立趣意書の〝卒業とともに西に東に袂を分かち、それぞれの人生の道を進むわけであるが、５年の歳月共に学んだ機縁は一生にわたって消えることはない。また今後毎年３月には後輩が続々と後につづいてこの学舎を巣立っていくのであるから、沼津高専卒業生の団結をはかり、相互の間また学校との連絡のとれる体制が必要である……〟が完全にでき上っていることにほかならないと思います。

又、20周年記念として同窓会名簿（第２版）が発刊できたことと、支部として〝東京支部〟が新たに発足できたことも、この20周年に共催できたことによる、同窓会として大きな収穫のひとつであると思います。このことは、やがて10年先の〝30周年式〟その先の〝50周年式〟の日には同窓会が主体者となり意義ある数々の催しを開くことができ、同窓会の実力が必ずや発揮できることと思います。又それが同窓会の使命ではなかろうか……。

おわりに、拠金していただいた会員諸氏に『20年史』を謹呈できたのも、同窓会顧問として常々御指導をいただいている市川先生の20年史編集にあたり『創設以来勤続二十年組五名の教授連のうち、最年長者に課せられた当然の義務と使命（宿命）』と位置づけて編集作成されたことと、同窓会より選出され20周年記念行事実行委員会、副委員長として刊行にあたり尽力いただいたＭ１の小池龍三氏（ジャパンコミュニケイション）のおかげと深く感謝と敬意を表します。



沼津工業高等専門学校同窓会東京支部

同　窓　会　会　則

第一章　総　　則

第１条　本会は沼津工業高等専門学校同窓会東京支部という。

第２条　本会は事務局を東京に置く。

第二章　目的および事業

第３条　本会は会員相互の連絡、親睦と母校との連絡を図り、工業技術振興に寄与することを目的とする。

第４条　本会は、前条の目的を達成するため次の事業を行う。

一、会員相互の連絡に関すること。

二、会員名簿の発行に関すること。

三、会誌等の発行に関すること。

四、その他必要な事項。

第三章　会　　員

第５条　本会は、次の会員を以って組織する。

一、正　会　員

沼津工業高等専門学校を卒業した者ならびに同校に２年以上在籍したもので、関東、甲信越、東北、北海道地域に居住または勤務し、理事会の承認を受けた者。

二、特 別 会 員

沼津工業高等専門学校の教職員ならびに理事会で推薦された旧教職員。

第四章　役員および職務

第６条　本会に次の役員を置く。

一、支 部 長　　１名

二、副支部長　　１名

三、事 務 長　　１名

四、常務理事　　若干名

五、部 会 長　　若干名

六、理　　事　　各クラス１名

第７条　役員は次の職務を行う。

一、支部長の職務

イ、本会を代表し会務を総理する。

ロ、第４条の事業を行うため、必要に応じて部会をおくことが出来る。

ハ、委員は支部長が選出し、その職務を委嘱する。

ニ、総会を召集し、必要に応じて理事会、委員会、その他の会議を召集する。

二、副支部長の職務

イ、支部長を補佐し、支部長に事故あるときは、その職務を代行する。

ロ、支部長の置いた部会の諮問に応ずる。

三、事務長の職務

イ、本会の会計業務を行う。

必要に応じて業務を理事に委嘱することが出来る。

ロ、年度終了時に決算報告書、予算案を作成する。

四、常務理事の職務

イ、会計を監査する。

ロ、会務に関し、理事会の諮問に応ずる。

五、部会長の職務

部会を統括する。

六、理事の職務

理事会を構成し、会務を処理する。

第五章　役員の選出方法および任期

第８条　支部長、副支部長、事務長、常務理事および部会長は理事会において選出し、総会の承認を受けるものとする。

２．理事は卒業年次の各科から１名ずつ選出された者および支部長の委嘱による者若干名とする。

第９条　役員の任期は３ヵ年とする。ただし再選を妨げない。

２．補欠により選任された役員の任期は前任者の残任期間とする。

第六章　会　　議

第10条　総　　会

一、総会は原則として３年に一回これを開催する。

必要に応じ臨時総会を開くことが出来る。

二、総会における審議承認事項は、出席正会員の過半数の同意を得た時可決される。

三、総会における決定事項は原則としてこれを全会員に通知する。

２．理　事　会

支部長が必要に応じ随時開催する。

３．部　　会

一、支部長が必要に応じ随時設置する。

二、部会長が委員長となり支部長の諮問に応ずる。

第11条　次の事項は総会において承認を受けなければならない。

一、事業計画および収支予算に関すること。

二、事業報告および収支決算に関すること。

三、役員の選任に関すること。

四、会則の改廃に関すること。

五、その他会務運営に必要な重要事項。

第七章　会　　計

第12条　本会の正会員は入会費を納入するものとする。

入会費　　2,000円

第13条　本会の経費は入会費その他を以ってこれに当てる。

第14条　本会の会計年度は４月１日より翌年３月31日とする。

第八章　雑　　則

第15条　本会の正会員は住所、姓名、勤務先等の変更に関して、その都度事務局に連絡しなければならない。

第16条　本会則は総会における審議で変更することが出来る。

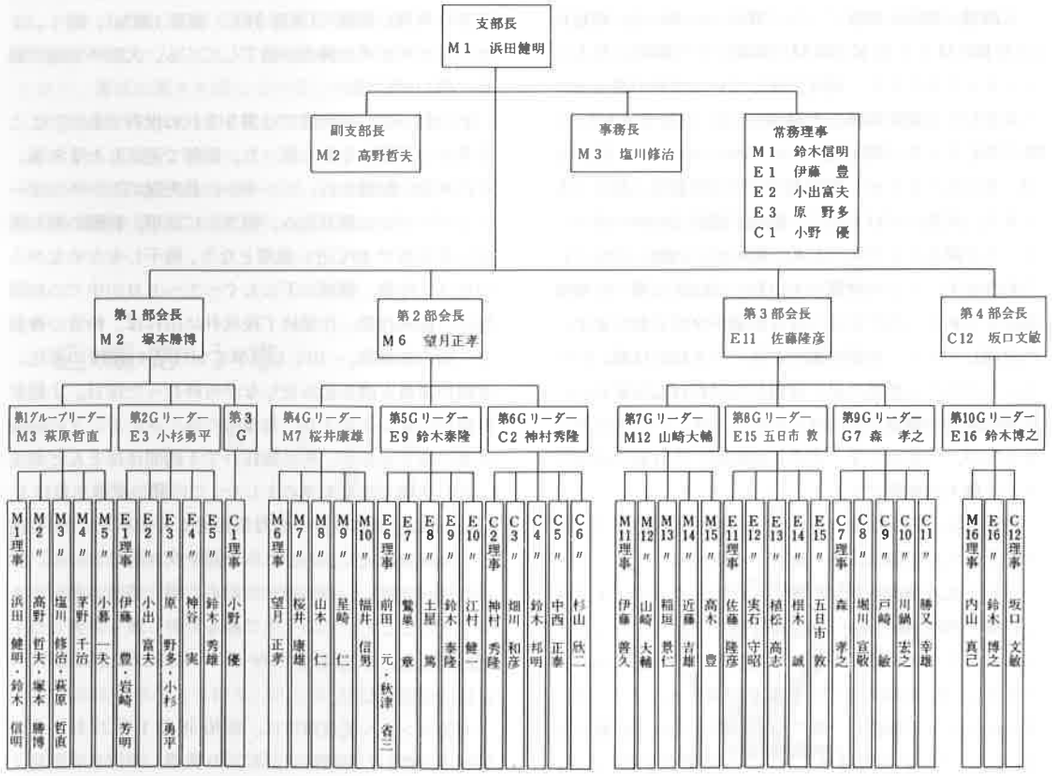
第17条　本会則を施行するに必要な細則は理事会の審議を経て別に定める。

付　　則

この会則は昭和58年７月３日から実施する。

（昭和58年７月３日制定）

沼津工業高等専門学校同窓会東京支部役員



近　況　報　告

青函トンネル

M2　原　川　　実
日本鉄道建設公団

先日、同級生の仁科君より、突然10年振りの電話が入り、あまりの突然さにビックリ。又、同窓会誌に何か書いてくれないかとのことで、再度ビックリ。仁科君曰く「青函トンネルの完成も間近になったから、青函トンネルのことでも」と、もう原稿を書く奴は決っているんだというような口振り。学生時代、仁科―原川―深沢と続く名簿順で、実験等の際の仲間としてレポート作成には、大変お世話になった大恩もあり、お引受した次第であります。

皆様、新聞、テレビ等で御存知の方も多いと思いますが、青函トンネル建設工事についての概要と、私の仕事の一端をお知らせいたします。

北海道と本州を海底でつなぐ青函トンネルは、総延長53 K 850 Mうち23 K 300 Mが海底という非常に長大なトンネルであります。現在完成している世界の長大トンネルとして上越新幹線の大清水トンネル(23.3 KM)、イタリアとスイスの間を結ぶシンプロントンネル(19.8 KM)等がありますが、海底部だけで世界最長の長さであります。又長いだけでなく、海面下最大240 mの深さのところを掘さくしてゆくため、常に水との闘いがなされております。ここの地質は火山岩と火山灰の積った堆積岩などであり、その中に大きな断層が9本もあります。水を通しやすく、軟弱な箇所が多いうえに上は海。いったん水が出たら無限の量を覚悟しなければなりません。工事は非常に慎重に施工されております。いかに水を出さないか、いかにうまく水を止めるか。これがこのトンネルの最大の課題です。

地盤には、細かな割れ目があり、海水が雨のように落ちてきます。工事は注入―掘さく―吹付コンクリートというサイクルの繰り返しで施工されております。まずさく岩機で約80 ㎜の孔を70個程度明け、セメントミルクと水ガラス（ケイ酸ソーダ）の混合液を高圧注入ポンプで注入し、約70 m先までの地盤を固め止水します。次にダイナマイトで爆破し、馬てい形鋼材を入れ、岩盤を支え、コンクリートを吹付けてトンネルの壁面を固めます。掘さくは1 mずつ進められます。

過去に4度の異常出水がありました。慎重なうえに慎重な旋工をしてきましたが、自然の力は、我々の技術のはるかに及ばないところにありました。特に昭和51年5月の北海道方の異常出水は、最大湧水量80 ㎥/分という未曽有のもので、坑道のほとんどを水没させるという事態となり、青函トンネルももうこれで終わりかというところまで追いつめられました。さく岩、ジャンボ、ずり積機、蓄電池機関車、ずりトロ等のほとんどは埋没し、残された箇所は後方のポンプ座のみとなりました。このポンプ座の排水能力は50 ㎥/分であり、湧水量よりはるかに下廻るもので、水没は時間の問題となりました。このポンプ座の水没が、青函トンネルの終わりとなるということで、機械担当の私は、猛烈な緊迫感を感じると同時に、過ぎし日の事が走馬灯のように脳裡をかすめました。昭和43年4月、生れて初めて入ったトンネルの工事現場は異常に蒸暑く(温度34°C　湿度100%)、暗く、上からはポタポタと海水が滴下してくる、大変不気味で異様な感じがした。

私の持っている尺度では測りきれぬ世界であり、ここで果たして勤まるかと思った。函館で過ごした2年後、その現場に配属され、トンネルの最先端のトンネルボーリングマシンに乗り込み、掘さくに従事。岩盤の熱と機械の発生熱で40°C近い温度となり、梅干しをなめながらの掘さく作業。機械の下にもぐってヘドロの中での故障箇所の修理作業。作業終了後坑外に出れば、粉雪の舞散る一面の銀世界。－10°Cと一挙に50°C近い温度の変化。直轄作業員と酒を組み交しながら終わった毎日。上越新幹線中山トンネルより、急遽送られてきたポンプの設備作業に取りかかり、死に物狂いで1週間はほとんど徹夜に近い状態で作業を進めました。この間の総湛水量は1,845,000 ㎥。天は私達の努力を見捨てませんでした。青函トンネルは水没寸面のところで息を吹き返しました。排水設備が完成し、水が揚がり始めた時、感激の涙が止まりませんでした。私の人生で最も苦労し最も燃焼した1週間でした。学生時代バレーボールで鍛えた体力が大いに役に立ちました。

青函トンネル先進導坑は、昭和58年1月27日、中曽根総理の押した発破ボタンにより貫通。本州と北海道は陸続きとなりました。本州方の切羽の最先端に白煙が上り、北海道方の明りが見えた時、本当にこのトンネルの仕事に携わることが出来た喜びを味わうことができました。

昭和14年アジア、ロシア、ヨーロッパを結ぶ夢の大陸縦断鉄道構想の一環として、研究に着手されて以来、実に半世紀近くの歳月が経過。この間昭和29年9月の洞爺丸事件では、タイタニック号沈没に次ぐ世界海難史上第2の惨事を引き起こし、1,430人という多くの人々の尊い命が失われました。北海道の人々は津軽海峡を「しょっぱい河」といい、本州のことを内地といいます。それほどに北海道と本州の距離はこの河によって実際以上に引離されてきました。

陸続きになったことによる国土の一体感は、北海道に住む人でなければわからないと思います。昭和60年初めには、本トンネルの貫通が予定されております。その後には軌道、電気、機械関係の開業設備を施工することになっております。現在間近にせまった開業に向かって、排水設備、換気設備、消火設備等の機械関係の開業設備計画を練っており、大変忙しい毎日であります。私達機械屋の仕事は、土木工事に関連する建設機械の開発、施工から開業用の機械設備まで、非常に間口の広いものであります。土木主流の職場の中で非常に少ない機械の職員。今までは縁の下の力持ち的存在でありましたが、開業設備の施工に入ることで、私達が主役の座になる時期となり、責任の重さを感じているこの頃であります。

学窓を離れてすでに16年。その大半を北国の地で過ごし、女房も道産子。静岡の方へ帰ることも非常に少なく、先生方や同窓の皆様にお逢いすることが出来ず、日頃の非礼を紙面を借りてお詫び申し上げたいと思います。

近頃思う事

M2　細　井　道　泰
㈱大道技研

今回、仁科理事より同窓会誌に何でも良いから寄稿せよとの命令を受け、気軽に引き受けここに筆を取った訳であるが、その途端に、はたと筆を置かざるを得なくなった。

一体何を書けば良いか、皆目見当がつかない。青春時代恋文の文面を考えた時と、同じ様な困惑感にとらわれた。

恋文の場合には、一発で相手を参らせようと、必死に考えたが、その後の状況を自分勝手になおかつ非常に楽観的に想像し胸踊らせながらであった。しかし今回ただ困惑感にのみとらわれている。何を書けば良いのだろうか、適当な題目が見つからず無為のまま期限が来てしまった。ええい儘よ。まとまったものが自分に書けると思うのが間違いなのだ。ただ思い付いた事をそのまま書け。文のまとまりなぞくそくらえだ!!　そう悟ったまでは良いが、まだ迷っている。何と女々しい男だと自分を叱咤するが何ともならない。

日頃の信条としている「迷っているならまずやってみろ、それから考えれば良い」が何とも情けなく思えて来る。

しかし、もうタイムアップ寸前、とにかく原稿用紙の枡を埋めよう。

学校を卒業して早や十有余年現在の私は、「㈱大道技研」という設計事務所を経営している。法人設立後8年資本金100万円、従業員数6名、年売上5千万という、非常に小さな事務所であるが、私にとっては5番目の子供という気持ちである。(申し遅れたが私には、1男3女の息子、娘に恵まれている。)

サラリーマン生活を8年経験しているが、その最後に母親の病死という事態に会い、その時の看護に対する不自由さが私を、独立に追いたてたのである。そうでなければ今頃は韓国か、マレーシアの海外派遣要員として忙しくとも気楽なサラリーマン生活を送っていただろうと思う。

そんな不純？　な気持ちで独立した為か、昼間のんびりとしていては、夜せっせと図面をひくという様な仕事への取組み方であった。

そんな態度で暫くは一人で、のんびりと仕事をしていた。そんな時に一人の男を仕込んでくれないかという依頼があった。出来るかどうかは分らないが、生来楽観的な私は気軽に引き受けてしまった。他人と一緒に仕事をするという事がいかに自分を時間的に不自由にさせるかをその後改めて知らされた。

しかし、それが今の会社経営に情熱を燃やす現在の私を作ったのだろうと思う。

どうせやるなら法人にと考え、翌年「㈱大道技研」を設立し、その代表となった。しかし、実態は個人企業と何ら変りはなかった。私に経営者としての自覚が無かったからである。

極端な話、会社の金と自分の金とが区別がつかずどんぶり勘定の経営状況であった。

その後一人、又一人と人が増えたが、私の考えは設立当時と余り変らぬ状態だった。

義兄が横浜でプラント等の塗装関係の会社を経営しているが、彼から経営者の考え方を機会ある毎に教えられてきたが、私の本心は、そんな事を言われても今の自分には何も適応するものが無い。まだそんな段階ではないという事でただ御座成りに御忠告を有難く拝聴しておきますという程度のものだった。

私の考えが変ったのは妻が3人目の娘を産んでからであった。長男は性格的に他人を強力に引っ張っていく事が出来そうもないので、私は自分の後継者としてどうしてもあと1人男の子が欲しかった。

渋る妻を説き伏せやっと産んでもらったのに女の子だったので、私の落胆ぶりは身近な者でなくとも分かるかなりの重度さであった。しかし、考え直してみれば自分の子供ならば人格能力とも自分の期待するように成長するとは限らない。婿ならばある程度完成された人間を取る事が出来る。自分の子供と違って当たり外れがない。最も安全で確実に私の後継者を得る事が出来ると思い直した。良い婿を得る為には娘を誰からにも好かれる様な気立の良い子に育てることと、会社を社会的に認知される様に育てる事が必要である。前者は妻に任せるとしても後者は私がやらなければならない事である。その時会社はそれなりの規模と体裁を整えたものでなければならない。今のままでは駄目なのだ。私がそういう考えになるに大した時間は必要としなかった。私が小なりと言えども経営者としての自覚に目覚めたのはそれからである。

何とも不純な目覚め方である。

勿論、今そんな気持ちは無い。企業は生きものである。私の思い通りになるものではない。まだ海のものとも山のものとも定まらないのに後継者を求めるなどという大それた考えを持った事に赤面の至りである。私は企業への水やり人夫である。育て上げた後は誰がその後をやるかはその時に自づと決まって来るものである。企業否、法人は一人の人間である。今、我社は赤坊であるが必らず一人歩き出来る様にする。途中で死なせては何の為にこの世に出させたのか分からなくなってしまう。大事にそして厳しく育てていきたいと思って居る。幸いにも力一杯働いてくれる従業員に恵まれ、今我社は漸く「テークオフ」の段階に入った。何年後にはこうする。その為には今これを為さなければならないという計画を着実に実行出来る様になった。

今私は5番目の子供を立派に育てあげる自信に満ちている。数年後にはその成果を誇示出来る様にするのだ。

私の現在の心境はこうである。

同窓会員諸氏になお一層の御指導御鞭撻の程を御願いして筆を置きたい。

昭和59年10月15日記

変わった欲望—これからの商品

E2　深　見　幸　輝
日　本　碍　子

十六年の昔、我々を迎えた産業界はいわゆる高度成長経済の頂点にあった。人々はまだそれほど物質的に満ち足りてなく、特に我々若者はたったの10円でも節約してきた貧しい学生生活を脱出し、ほしい物に満ちあふれた、しかも望めばそれらが手に入る、希望と活力に満ちた世界に入って驚いた記憶がある。

当然、我々は望む物をどんどん買い揃えていった。私も、タイプライター、双眼鏡、テープレコーダー、……独身寮退寮時までには何と持ち物がトラックに満載の状態にまで増えていて我ながらあきれたものだった。

私が人と違ってついに揃えなかったのは車である。多忙かつ職場が自動車学校もない僻地で、免許取得の機会のなかったことも一つの理由だが、それよりも車そのものがほしくなかった。家もない者が車を乗り回すなどはどこかおかしいと心の中で思っていたからでもあり、またほしい物はほしい順に揃えるという主義に従ったからである。だから例えば、普通のアマチュアでは珍しい口径20㎝もある天体望遠鏡を45万円も出して買ったりもした。

最近、世の中が落ち着いてきたせいか消費者一般皆が私と似かよった考えで物を買うようになり、我が意を得たりと喜んでいる。例えばビデオが随分普及したが、「ビデオなんかほしくないから買わないよ」と頑として譲らない人がかなり多い。

これが国内需要低迷の一つの大きな理由で、経済界からみると困った問題である。そこで軽薄な政治家連中は公共投資だの、ミニ減税だのかびのはえたような古いやり方で景気をよくしようとしているが、結果は芳しくない。

しかも、気を付けねばいけないことは、世界の資源の中で、石油・木材・銅など汎用材料中に枯渇の見えているものが大変多くなったことである。普通のやり方で景気回復をやれば遠からずして資源上の問題で行き詰まろう。

それに、日本に限って言えば、例え所得を増やしたところでそうそう消費者が支出を増やすまい。ほしいのは土地くらいのものだからである。

それではどうしたらよいか、私なりに愚考するところを述べよう。

もう内需はなくなってしまったのか。いや、ある。人間の欲望は無限だからである。例えばテレビでも、もし手で握れるくらい小さくて、しかし、光を放ち画面を壁に大写しできる迫力満点のものができたら私はすぐにもほしい。泣く子を寝かしつけるのにおんぶしてやると早いが、そんな程度の単純作業は女の容姿をしたロボットがあったら買ってやらせたいと思う。もちろん言う程簡単に商品化はできないが、人々はまだ物質に満ち足りてはなく、内需は潜在していると言いたいのである。

もし、これからできるだけ小さくて役に立つものを作るようにするなら、資源上の問題もそう心配はない。有用なものは堂々と高く売るがよく、さすれば経済の発展も無限であろう。

私は、エジソンの偉大さを発明の数ではなく、その一つ一つが世の中の人が「あったらほしいな」と思うものを実現させたことにあると評価している。

我々も、これから世に出る高専生もしばらく低成長経済という寒い時代を生きねばならないが、それを不運に思うことはやめよう。我々高度成長時代の落し子は軽薄に進路を決め、自分の業(わざ)が世の中に役立っているか否か見失っていた者が多いが、これからは好むと好まざるにかかわらず、本当に役に立つものしか扱えない。人がもう持ってるからいらないと言うのに安いから得ですよと押しつける卑しいことはすまい。日本はもはや貧しくないので、人々が本当にほしく思う物は売れるに決まっているから、そういう物を作る限り希望が一杯といってよい。

今、学ぶ

M3　田　中　信　博
花　王　石　鹸

懐かしい沼津高専を卒業して、早くも15年余りになる。東京へ出て、機械屋にはあまり縁のなさそうな花王石鹸に入社して、今まで夢中で生きてきた。

当社のようなトイレタリー商品を生産しているところは、莫大な生産をこなすために、効率の良い生産および経済的なディストリビューションが大変重要なのである。

入社以来、包装技術部（兼物流部）に所属し、ずっとこの生産から消費者に到るまでの物流という分野を担当してきた。主として、流通センターや工場の自動倉庫を計画立案し、全体の流れを合理化する仕事である。

少量多品種化時代の到来とともに、F（ファクトリーオートメーション）A や F（フレキシブル・マニュファクチュアリング・システム）M S が喧伝されるようになってきたが、生産といえども本来物流分野であると自認している。

新しい拠点を計画する度(たび)に、商品の流れがより簡単なプロセスになり、コストがかからないシステムになるようにしなければならない。

この仕事を通して、生産の特性から、販売分野、流通分野に到るまでの業務の内容を知ることができた。

生産技術分野だけならば、純粋な技術屋として生きていけるのかもしれないが、マーケティングから考えると、どうしても社会科学を学ばなければならないと思う。物流技術をより生かしていくためにも、その前提となる社会の動きを把えるセンスがなくてはならない。そんな事を感じて、現在、大学通信教育で、法律を学んでいる。

通信教育の良い点は、学費が安いこと、出張などが多くても自分のペースで学べること、スクーリング（面接授業）で世代・職業を超えて多くの友人をつくれることなどである。特に法律学科は、30代以上が半分以上を占め、社会経験豊かな人が多い。むしろ社会経験の少ない20代にとっては、法律はおもしろくない学問のようである。

「少にして学べば、則ち壮にして為すこと有り。壮にして学べば、則ち老いて衰えず。老いて学べば、則ち死して朽ちずいれる」である。

高専時代、勉強は試験の前にだけやるものと決めこんで、剣道ばかりやっていたが、もっと「勉強の訓練」を自分に課すべきであったと遅まきながら感じつつ、自分に挑戦しているところである。

仕事から離れて、スクーリングなどで、学生気分に浸れるのも幸福だと思う昨今である。

大 気 汚 染

C2 泉　　克 幸
(環境庁)国立公害研究所

筆者は大気汚染の研究に従事しているので、これに関する最近の問題について少し触れてみたい。

光化学スモッグは都市域でおこる局所的な高濃度の大気汚染現象であるが、ここ数年は人間への直接の被害もおさまり、沈静化した観がある。しかし、汚染が低濃度化して広域化しているとの指摘も数多くなされており、予断を許さない状況にある。日本での例を挙げれば、京浜地方の汚染が遠く長野県にまで及び、比較的高濃度のオキシダントが観測されることも知られている。しかし、局所的な汚染というよりはむしろ地球的規模の環境大気の質的（濃度）変化が最近の世界的な問題として、しばしば新聞やテレビ等で取り上げられるようになっている。炭酸ガス濃度の増加による温室効果の問題、ハロカーボン（フロン等のハロゲン化炭化水素）や亜酸化窒素等による成層圏オゾンの破壊の問題、酸性雨（雨が酸性化し生態系への種々の悪影響が現われる）問題、北極圏大気の汚染の問題等々……。

炭酸ガス濃度の増加に伴なう温室効果の問題の主な原因は、現在の人為活動の根幹をなすエネルギーを石油等の化石燃料の燃焼（自動車を含む内燃機関）に依存していることにある。大気中の炭酸ガス濃度は現在約350ppm（0.035 vol%）であるが、毎年約2ppmの割合で増加している。一方、太陽光は地表に到達するとその一部が赤外線として放射されるが、この赤外線を炭酸ガスが吸収する。したがって、その増加が熱収支をくずし、地表付近の温度を上昇させる。南極・北極地方の氷の融解、これによる海面の上昇、異常気象の現われ等が懸念されている。化石燃料の使用量は増加し続けているので、今後数十年でこれらの現象が顕著になるものと見積られている。

ハロカーボンは冷媒、不燃溶剤、スプレー等に使用されている。一方、亜酸化窒素は農業生産に使用される窒素肥料から微生物により生産される。これらは、いずれも化学的に安定であるために対流圏では消滅せずに、成層圏の短波長の紫外線により光分解して成層圏のオゾンを連鎖的に破壊する。成層圏オゾンは太陽光の短波長の紫外線を吸収し、地表の生物をその紫外線から守っているので、もしオゾン層が破壊されれば、地表の生物は死滅の危機にさらされる。ハロカーボンは自然界には存在しなかったものである。

酸性雨は、日本では被害が少ないが、米国東部やカナダ、北欧諸国では湖沼の酸性化による魚類の死滅や森林の破壊等により大きな社会問題となっている。燃焼により排出される窒素酸化物や亜硫酸ガスが、大気中で硝酸や硫酸等の強酸性物質に転換されることが主な原因と見なされている。

以上の問題は、ほんの一例にすぎないと思われるが、いずれも全世界的な人為活動によりもたらされるものである。したがって、これらの問題を切り抜けるためには世界各国による合意や取り決めが必要であると思われるが、現在は各国の利害関係のために防止の方向へは進展していない。新エネルギー源の開発、汚染物質の排出削減への努力、新物質の開発等も重要な課題であるが、現状では、我々の問題意識が重要であるように思われる。エネルギーの節約、ハロカーボンを含むスプレーの使用の抑制、資源の再利用等に心がける必要がある。こうした努力の積み重ねが大切な地球の環境を保全してゆく第一歩につながると信じている。読者は全く縁のない空の話と思われるかもしれないが、やがては地球の美しい自然の姿が失なわれてしまうかもしれないという危惧の念を心のすみに居いていただきたいと願っている。

M 6 クラス会

伊豆修善寺温泉　菊 屋 に て

M6　石 黒 俊 一

「ヨォ　チャーリー、お久しぶり」菊屋旅館の前で丸顔のオヤジさんに声を掛けられた。

「？……、ああ前島か、誰かと思ったよ」

きのうのように記憶している階段教室に並んだ顔とに一瞬のとまどいを感じた。

しかし一同に会し、座った友の顔を見渡せば、10年は消えてしまっていた。

「おい、元気にやってるか」

「よお、久しぶりだなあ、今どこにいるんだよ」

「なんだ、すぐ近くまでいったことがあるよ」

「お前、3人も子供いるのか」

「オイ、俺はまだチョンガーなんだぞ」

飲めば学生時代の如き陽気な高専生の顔がそこにいる。各々が「卒業以来すごしてきた歳月は、決して平らではなかったはずであるが、それを通りこしてきた顔であった。

団ちゃん、三ツ井さん、大橋さんのおはこも出て、和気藹々の時は過ぎ、校歌をうたう声も、万歳をする声もくったくがなかった。

一室に集まり、お互いの胸の中にある過去、現在、そして未来を語り合う話は夜遅くまで続いていた。

日々は、一時の休みもなく過ぎている、現在の自分が将来の自分へと続いていることを思い、各々が、自分の、そして友の家族の幸わせを思い、山や谷を越えて5年、10年後に再びつどう日を夢みて歩いて行こう。

身体を大切に。チャーリーより。

クルマはニッサン

M7　土 屋 京 太
日 産 自 動 車

同窓の仲間もそれぞれが結婚し、子供ができ仕事に追われ、なかなか集う機会が持てず疎遠になってきた12年目の秋である。

入社以来、富士市にある日産自動車・吉原工場で自動車のトランスミッション製造技術9年、販売店出向1年半、そして現在、購入品ＶＡ(原価低減)、業務のＯＡ化、省エネ等を幅広く担当し、戸惑いながらも楽しくやっている今日この頃である。

現在、当工場には、1期生の久保田課長（ＪＡＴＣＯ出向中)を始め、2期生の清水さん、3期生の稲木さん、6期生の佐野さん、8期生の小川君(販売店出向中)、18期生の後藤君と私で計7名がいる。皆、個性を生かし頑張っているようである。

話はさかのぼって12年前、会社を選ぶ際、3つのポイントに絞った。

①大企業で安定している。(オイルショックの体験から)

②実家に近い。(長男であるため)

③興味のある自動車関係（そのころスカＧに乗るのが

夢だった）

そうなると決めるのは早かった。長泉町に近接する大企業は数少なく、それはトヨタか日産だった。しかし、すでにトヨタは枠が一杯で残る日産となった。その時よく言われたのが大企業では歯車の１つでしかないと――それは私にとっては見事にはずれた。何をもって歯車と評するか、人それぞれであろうが、興味深く、やりがいのある仕事を幅広く経験できる今の日産に後悔はない。あるとすれば己の努力のなさだけである。

今、中堅と呼ばれる年になり、仕事にそして人生に悔いのない足跡を残したいと思っている。

三島に戻ってきました

M9　井　澤　庄　次
東　京　電　気

球形のタイムマシンに乗って、時をかける旅を続ける私の名前は未来人「イザーワ」という。コクピットの副操縦席にちょこんと座るのは、娘『ユー』。そして調理室でフライパンを振るのはカミさん「マナーミ」。

今は1975年、秋、沼津上空で地上に近づく。門池から左旋回し、秋色に染まる小林ヶ丘を眺める。国産電気のグランドでは陸上競技が開かれている。沼津高専のグランドではいろんなかっこうをした学生達がソフトボール、テニスなどと好きかってにやっている。これが体育の時間だろうか？　20世紀の体育っていいかげんなんだなあ。機械科５年の階段教室の窓からのぞいて見ると、なんと３分の１の学生が眠っている。これもいいかげんだなあ。今、先生が講義に熱中する隙を見て学生が二人、教室を抜け出そうとしている。その時だった。ユーの手からビームが出て、二人の学生を捕えた。二人はストンともとの席に戻されていた。二人には、何が起ったのか判っていない。ユーが手に持つのは、我々の時代の１歳児用のおもちゃ「簡易捕獲ビームピストル」だった。ユーは「あ、ニャンニャン」と言って喜こんでいる。高専の周りの樹々もすっかり色づいている。テニスコートの横にはアケビがなっている。図書館下の道路には落葉がしかれている。寮の裏の林には栗が色づいている。無事に授業を抜け出せた学生が何人か栗拾いを楽しんでいる。

いろんな友達がいたっけ。いろんな夢を持った人達がいたっけ。今はみんなどうしてるだろう。

寮に住んだ仲間、教室で机を並べ授業を聞き、そして眠りこけた同級生、そして先生方、元気ですか。信じられないけど、もう10年になろうとしています。僕の方は卒業後、６年間仙台の大学に行っていましたが、４年前伊豆に戻り、大橋先生、池上先生らの助言もあって、東京電気に入社しました。現在三島工場、通信研究室というところで、新製品の開発を行っています。ちなみに、１昨年、嫁さんをもらって現在、１歳になる娘がいます。名前は「優（ユウ）」といいます。親の贔屓めだと思うけど、すごく可愛いです。（芹沢んとこより可愛いぞ。）最近やっと自分も人の親だという自覚が出てきた、そんな気がします。同級生の中にも、きっと同じくらいの子供がいる人も多いんじゃないですか。また、便りでも下さい。この場を借りて住所を書いておきます。

静岡県田方郡函南町柏谷950―６

雑　　感

M11　長　沢　　敦
東　　芝

つい先日、聞き覚えのない伊豆の民宿から一通の手紙が届いた。中には新設民宿の案内状と、見覚のある字が印刷された手紙が入っていた。賢明な読者はすでにお分りのことと思うが、免許の書き換えも３回を過ぎる頃となると、何人かの仲間の脱サラを風の便りに聞く。くやしいことにその連中のほとんどが妻帯者であることだ。あの卒業式の日体育の三ッ井先生がおっしゃった言葉を忘れてしまったのだろうか。

技術屋の悲しい環境の為か、私の職場では長い独身生活を謳歌している先輩が数多い。その為か、私自身が婚期の只中にあることを忘れてしまいがちになるが、冷静に観察すると、高専卒（他校も含めて）の先輩、後輩、同僚達の妻帯率が異常に高いことに気づく。この技術畑と言う逆境にもかかわらずである。この点について考察したところ、次の結論に達した。

1．時間の使い方が上手→寮生活体験の為、集中力に富み、仕事を手際良く片付け、時間を有効に使用している。
2．逆境に強い→これも寮生活によって培われたと思われる。
3．人柄の良い技術者である為、人に好かれる→人間関係が円滑となり、仕事も早い。
4．経済力がある→コスト意識が高い。青春時代から質素、倹約を強いられてきた。
5．女性を見る目が肥えている→５年間、男ばかり見て育った。

と言うように我々には他にない特有の資質が潜在しているのである。特に伝家の宝刀３番は効き目がある。私もこの資質を早急に掘り出してみたいと思う。

話は変わって、工学を志してかれこれ十数年経つが、ある程度理論の出来上がっている科学現象や金勘定にどっぷりつかっていると、無性に理屈で割り切れない世界が恋しくなる。早い話が理工学以外の文学、医学、心理学等に関心を抱くようになる。そしてこれらは全て推測で成り立っているのが好ましい。

学生時代からＳＦ小説や超心理学に興味があったが、ここ５～６年の間にその類の本が多数出版され、又東京に住んでいた頃はその方面の友人が出来、十分欲求を満たしてくれた。高専時代のクラブ（合気道）の関係で鍼師や整体術師の知り合いがあり、益々魅かれていった。たまたま、今年は空海の1150年御遠忌ということで真言密教がブームに乗ったようで精神世界が急にクローズアップされてきている。昔から〝病は気から〟と言うように、精神力は肉体を支配できることが知られている。それを実践した心療内科という医学もここ数年で発達してきている。不治の病と言われるものもイメージトレーニングを積むことにより高確率で治ったことが報告されている。

この精神力という怪物は、修業をすることにより自分の体だけでなく他人の体、はたまた環境や社会にまで影響するようである。私自身もある程度経験しており、その手の講演会やシンポジウムに時々顔を出している。方法、形体に差はあるもののその分野で心髄とも言うべきものは共通しているようだ。ヨガ、TM、演劇塾、ＳＭＣ、宗教等数えたら切りがない。人によっては自分自身でこれらと似た様なことを確立して実践している人もいる。誰にでも多かれ少かれ、経験していることなのだ。皆さんも何らかの形で行なってみると、悩みを解決できると思う。

私　の　近　況

M12　小　池　伸　二
牧野フライス製作所

「リーン、リーン」
「もしもし、設計です」
「ああ、組立の○○ですがねえ、××の部品が取り付かないのだけど、現場まで来てくれない？」
「はい、すぐ行きます」

我々設計部員は、図面を抱え、安全靴を履き、帽子をかぶって工場にすっとんで行く。こんな光景は日常茶飯時だ。特に私のような未熟者は、一日に何回となくこの忌まわしい往復をすることもある。

私は、高専を卒業して６年半、現在の会社に入社して２年半を経たが、現実には未だ一人前の設計者には程遠い次元のミスも犯している。ただ確実に言えることは、ずぼらな私も機械の重要な部分、大切な寸法はどこかということがわかってきたので、それらに関係する部分のミスはほとんどなくなってきた。

今年の国際工作機械見本市に出品する新機種の設計にここ９ヶ月ほど携わってきた。自分の考えたものが実際に一つの形になるのは、楽しいとかおもしろいというより、一種の感動的な何かを覚える。

今年の１月に新機種設計に初めて加わった。それまで私の仕事は、改善提案の処理、各種オプションの設計、特殊仕様の設計などであった。これらは、今ある機械の内容を知るには最適な仕事だったが、短期間で仕上げねばならず、一つのポリシーに従ってじっくりと練る仕事ではなかった。だから、新機種の設計は待ちに待ったものだった。

しかし、未熟者には全く新しい機械を設計する事は困難をきわめた。今までの仕事と違い、参考にできる機械がほとんどなく、頭の中に想像図がなかなか抽けなかった。１ヶ月もかかった案が一瞬にして没になったこともあった。設計者全員で話し合っても、案はいくつか出るのだが、どれが正しくどれが誤まっているかは作ってみないとわからないという状態だった。また、設計分担も決まり、詳細が決まってきた頃に、悪夢のような仕様変更が行なわれる。何回も頭に血が上り、拳を握りしめた。欲求不満の状態だった。

しかし、機械ができ上がってくるとそんな事はどうでもよくなってきて、今は実に爽快だ。見本市での反響に期待してわくわくするような気分もある。

おもしろい事に気持ちに余裕ができると、更に改善できる個所がいろいろと見えてくる。先輩たちも、こんな経験をして洗練されたセンスを身につけたのだろうと勝手に感じている。

さて、私は仕事ばかりしているのではない。いや、仕事よりも遊んでいる方が多いというべきか。最も力を入れてやっている事は、会社のラグビー部だ。現在、関東社会人ラグビーフットボール協会の２部に所属するチームだ。私は、会社にはいってから始めたので２年半になる。人数が足りない事もあって、右のウイングで試合に出ている。

今年我がチームのリーグ戦成績は3試合2勝1敗。あと3試合残っているが、すべて勝って1部との入れ替え戦に出場することが目標だ。(注、私は秋季リーグはトライなしで非常にくやしい思いをしている。)

とりとめもない事を長々と書きましたが、近況報告とさせていただきます。

会 社 と 私

M13 山 田 武 久

明電ソフトウェア㈱

2～3年前に、会社説明で母校の教室を、訪れた時、現役学生諸君に、こう言ったことを覚えている。

「私は、明電ソフトウェア㈱の社員であるが、㈱明電舎の沼津事業所で仕事をしている。しかも、ソフトウェアではなくハードウェア関係の仕事だ。」(世の中のソフトウェア会社あるいは、ソフトウェアハウスには、よくある『派遣』というものだ。)しかしながら彼らは、少なくとも私が、ハードウェアに従事しているとは、予想も、つかなかったことだろう。当時の我社は、ちょうど充電の時期にあたり、従業員の派遣により、技術力の蓄積を図っていたのである。

会社設立後、6年目にして、やっと親会社からの脱皮の兆しが見えてきた。完全に独立するのには、まだまだ時間がかかりそうでは、あるが……

目指すは、ハードウェアを付加した、システム販売だ。

『おもしろくなければ仕事じゃない。

儲からない仕事は、やりたくない』

をモットーに生きる上司なかせの問題社員、頑張ってます。

以上

主 婦 雑 感

C9 中 瀬 裕 子

(旧姓 西 山)

暑さ寒さも彼岸まで、とはよくいったもので、全国で記録をぬりかえた猛暑がうそのように涼しくなりました。先輩、同輩、後輩の皆様、それぞれにお元気で御活躍のことと存じます。

さて、先日、近況報告を書いて欲しいという依頼があり、引き受けてしまったのですが、はて、主婦におさまり三食昼寝付の生活に甘んじている私、何と書いたものか困ってしまいました。しかし、原稿の締切りも迫ってきており、ここは奮起して、主婦といえども、三食昼寝付におさまっていられない現実について、思いつくまま書いてみようと思います。

生まれてこの方、生地を離れることなく、20余年をすごした私ですが、夫の勤め先ということで、名古屋にやってきました。名古屋というところは、驚くべき人の数、建物の集合です。夫の勤める名古屋港の埋め立て地内には、整備された道路が何本となく走り、広い敷地に大きな工場が建ち並んでいる姿は異様です。ここに日本有数の工業地帯があることを肌で感じさせられます。そんな中、「人柄のよい技術者として、世の期待に答えよ」の教えの下、高専を卒業した私が、一専業主婦として、家事に追われているのが、名古屋にいると何ともおかしい気がします。しかし、高専卒業後、一企業に就職して、技術開発の仕事に従事した経験は、夫に対する理解を深めるためには、とても有意義です。それでも最近のテクノロジーの進歩は、目を見張るものがあり、夫が聞かせてくれる話の中にも、OA化の波、ハイテク時代の到来を感じます。

ところで、主婦といえども、これからの波に乗り遅れるわけにはいかないと思います。衣食住という大きなテーマは、主婦に課せられた永遠のテーマであると同時に、最近では平和で裕福な世の中になったため、以前にも増して、このテーマが重要視されてきています。家庭内における仕事も、めだたないのですが、日に日に変化し、その対応に戸惑うこともしばしばです。しかし、主婦の仕事は、一生のテーマですから、焦らず、余裕を持ってこなしていきたいと思います。

情報多重化の時代といわれる現在、世の中の大きな波に乗り遅れることなく、かつ、自分自身のアンテナを世の中にしっかりと、張り巡らせて、確実な情報選択のできる感性を主婦として持ちたいと思います。機械にはできない人間の技術が、主婦の腕の見せどころです。ちょっとしたアイデア、工夫をとり入れた生活を目ざしてがんばろうと思っています。

C9クラス会　S58年3月(口野にて)また集まりましょう

雑 感

M15 白 花 良 治

三菱電機㈱通信機製作所

沼津高専を卒業して3年半たちました。私は現在三菱電機の通信機製作所で工作技術スタッフをしています。通信機製作所ではOA機器、パーソナル無線、自動車電話、ディスプレイ、レーダー、パラボラアンテナ等を生産しています。特にアンテナは、今年10月に直径64mの深宇宙探査用アンテナが完成し、これまで日本一だった45mを上回ることになります。先日職場の旅行で、このアンテナの現地見学会がありました。45mのアンテナは、私の入社前に作られたもので、先輩から当時の苦労話を聞くことしかできませんが、64mアンテナは工場内で生産の開始から見てきたもので、山の上にそびえるアンテナを見た時は、いろいろと思い出すことがありました。現在はPCM録音再生機の磁気ヘッド生産を担当しています。私にとってまったく新しい分野であり難しいこともありますが、それだけにやりがいのある仕事だと思います。会社へ入ってから、いろいろなことがありましたが、最近になってやっと仕事のおもしろさがわかりかけてきたところです。

モンブラン登頂

E15 村 松 正 広

日立プラント建設

会社に入って3年半になりますが、日立プラントという会社は、製造メーカーと違って工事主体の土くさい会社なので、監督で工事現場に行って、職人とケンカしたり、メーカーに機材の納期フォローで電話でガンガン言い合ったり、高専で学んだ技術はあまり使いませんが、けっこう毎日、それなりに充実して仕事をしています。それでも今年の冬から春にかけて、アンローダー(港湾の荷役機械)の据付けにサウジアラビアに行かせてもらい、今は南アフリカの仕事をしています。海外の仕事をしていると、やはり英語力が必要なことを強く感じます。

又、私的な事では、表の写真に写っている僕は、ヨーロッパアルプスでのアルピニストとしての僕で、この夏、無理して2週間の休暇をもらい、念願のモンブランに登ってきました。

社会人1年生

M18 澤 田 清

桜井製作所

就職して6ヵ月目ともなると、会社の良い点、悪い点が目立ってくる頃だと思います。

私の場合、会社の悪い点ばかり見てしまっていて、不満を言い合ったりもしています。

又、毎日の生活でない、違った世界でしばらく過ごしてみたいという心境によくなります。時間に余裕ができたら、いつか思い立ったとき、計画もたてずにふらっと旅に出てみたいと思っています。

第22回東海地区高専大会総合成績表

種目＼順位			優勝	2位	3位
陸上競技			鈴鹿	岐阜	豊田
バレーボール			沼津	豊田	鈴鹿
バスケットボール			鈴鹿	沼津	岐阜・鳥羽
軟式庭球	団体		岐阜	豊田	鈴鹿
	個人		川上友則 朝倉哲(豊田)	早川昌司 古川雅章(豊田)	奥田健一 岡崎勝(岐阜)
硬式庭球	団体		豊田	鈴鹿	岐阜
	個人	ダブルス	中止	中止	中止
		シングルス	中止	中止	中止
卓球	団体		岐阜	豊田	沼津
	個人	ダブルス	松原範明 吉野真路(豊田)	院田晃宏 峯田顕久(鈴鹿)	古橋正隆 高橋悟(沼津)
		シングルス	山崎裕之(岐阜)	吉野真路(豊田)	志賀勝宏(豊田)
サッカー			鈴鹿	岐阜	沼津
ハンドボール			岐阜	鳥羽	鈴鹿
柔道	団体	全国大会予選	沼津	鈴鹿	豊田
		勝抜戦	鈴鹿	豊田	沼津
	個人	軽量級	米田竹志(鈴鹿)	山縣秀夫(沼津)	稲本(豊田),秋山(沼津)
		中量級	藤沢忠彦(鈴鹿)	伊藤暢章(鈴鹿)	石原(沼津),佐藤(豊田)
		重量級	林幸司(豊田)	森川憲一(鈴鹿)	駒谷(沼津),大薮(鈴鹿)
剣道	団体	全国大会予選	鈴鹿	岐阜	豊田
		勝抜戦	鈴鹿	沼津	豊田
	個人		浦口哲也(鈴鹿)	直江克典(鈴鹿)	笹川勝久(豊田)
硬式野球			鈴鹿	沼津	豊田・鳥羽
体操	団体		沼津	豊田	鈴鹿
	個人	床運動	瀬戸幸一(沼津)	伊藤義之(沼津)	前川浩二(鈴鹿)
		跳馬	伊藤義之(沼津)	森勝利(豊田)	畑中祐二(鈴鹿)
水泳競技			沼津	豊田	鳥羽
弓道	団体		豊田	沼津	鈴鹿
	個人		中川聖一(豊田)	佐藤正晴(沼津)	山嶋一誠(沼津)
空手	団体	総合	豊田	鈴鹿	鳥羽
		組手	豊田	鈴鹿	鳥羽
		形	鈴鹿	豊田	鳥羽
	個人	組手	宇都野公孝(豊田)	水野英俊(豊田)	赤谷正美(豊田)
		形	野呂昌司(鈴鹿)	清水宏一(鳥羽)	竹内聖一(鈴鹿)

水泳部

渥美武明

昭和43年発足の水泳部も始めは3年生が最上級生でスタートしたのが、今日では南小林游泳会員（水泳部出身者の卒業生）も68名を数えるようになった。歴史が積上げた人員である。先輩諸兄の築いた栄光を何時までも図書館ロビーに安置するために頑張るのである。笑顔、激顔、温顔の繰返しをしながら、栄光を背中に持ち自信に満ちて巣立って行く春秋である。

今年度も多彩な行事の消化で相変らずの忙しい年廻りであった。高専大会に向っての練習も10年連続制覇をしなくては、という言葉こそ口にしないが誰もが遂げなければの一念で励んだ。各高専からは、内には強力な選手が集ったとか、良い練習方法が得られたとか様々の情報が飛込んでくるので一層燃えた。おかげで故障者もなく開催地〝鈴鹿〟で表の通りの僅少差であったが〝杯〟が獲れた次第である。

水泳競技成績

得点

種目＼学校名	岐阜	鳥羽	沼津	鈴鹿	豊岡
400m リレー	3	7	5	4	1
200m 平泳	0	5	10	2	5
200m 背泳	0	4	6	3	9
200m 自由型	3	8	9	0	2
200m バタフライ	9	5	1	0	7
800m 自由型	0	4	7	3	8
400mメドレーリレー	3	2	4	5	7
400m 自由型	0	11	2	1	8
100m 平泳	0	1	13	3	5
100m 背泳	0	7	6	1	8
100m 自由型	7	3	12	0	0
100m バタフライ	8	0	1	4	9
200m 個人メドレー	0	0	6	7	9
800m リレー	3	7	5	2	4
合計得点	36	64	87	35	82
順位	4	3	1	5	2

競技中一同特に張り詰めた気持もなく、一喜一憂しつつ得点表を見ては、うなずき、笑い又は胸をときめかし愉しく過してきた。

帰りは部員40名、名古屋に寄り一泊、旅館主が、当店にとって縁起がよいといって特別にご馳走等を作って歓待をしてくれた。

次の日には、先輩のご厚意により、ブラザー工業株式会社の出向き、むずかしい先端技術の話を低学年にも理解できるように解説をつけて講義をして戴き、その工場・現場を見学させて戴いた上、昼食と記念品まで頂戴して帰省した。

7月22日。諏訪湖横断遠泳大会に20名の選手が出場。先輩2名も奥さんと共にこられた。観音岬から上諏訪湖岸までの3.8kmを全員が泳ぎ切り、市長さんより〝祝力泳、梅雨明けの母なる湖に立つしぶき、沼津高専殿〟と書かれた敷紙とトロフィーを受け意気を揚げ凱な気分を味わった。

帰着早々4年ぶり、懐しの富士登山の敢行、下山と共に、初島一熱海間、団体競泳大会に備えての合宿練習に入る。8月4日、穏やかなレース日和、今年こそはの気持ちで張り気って居た。参加30チーム、全国から精鋭が集った。当学も2チームがシードされ頑張ったが入賞一歩前（3時間01分5秒）に留まり、一般のレベルの高さをみせつけられ、今いち練習法の考慮を痛感した。続いて沼津市水泳競技会は相変らずの大入り大会で、例年並のメダル狩をしてきた。

8月8～12日間。初めてケースであったが、沼津高専「公開講座」として水泳教室を当プールで開講した。

親と子のため、沼津・駿東地区の人達、先着オープン申し込み順43名が参加して開いた。泳げない人達が5日

間の講習で終了式までに全員クロールで25m以上を泳げるようになり大層喜んでくれ成功を修めた。示範（コーチ）として4・5年生が受持ち指導にあたった。

以上のこと等があったりして、精神力の統一・集中力の涵養の扶けになればと、曹洞宗禅道場のメッカ、可睡斎へ体験参禅に一泊帯在した。噂通りさすがに厳しく、今までに知って得た坐禅と勝手が違い、食事の摂取法・坐り方等に至るまで強烈で、背中の青痣が癒えないうちに又一撃で扱かれた。短い時間ではあったが、それぞれが何か感じ得たものがあったようである。

9月2日。豊田・沼津・東京（頭文字をとりT・N・T）の高専水泳部が当地に集い競技会を催した。高専大会と異った零囲気で、和気藹々、記録は二の次としての競技会であった。部員達、お互同志、親睦、交流に溶けあっての愉しい大会であった。閉会式の感慨もひとしお。又来年も会いましょうと約束を交し手を握りあいながら東西に見送って別れた。

当日の競技運営、審判団も幸いこの地元に在住の先輩がこられ総べてがスムーズに進行しお礼申します。尚本大会には西武百貨店が肩入れをして戴きました。

9月15日。伊豆駿河湾選手権大会では選手権レースに相応した熾烈なものであったが、継泳種目においては追従を許すことなく、沼津高専の意気と力を示した。

残るシーズンオフは陸上となるが、毎年通り、伊豆東海岸駅伝・富士宮―白糸の滝駅伝・香貫山駅伝と出場し大いにハッスルをする所存であります。

柔道部

M5年生　駒谷昇司

「ファイト!!　行け!!　そこだ!!」という掛け声が鈴鹿市立体育館の武道場に響きわたる。私達団体戦の七人の選手は、燃えに燃えて第一試合の鈴鹿戦に臨んだ。私達は昨年の高専大会では、鈴鹿・豊田に破れて惜しくも三位となり、涙をのんだ。だから私達は全員この試合は第一試合でありながら、事実上の優勝決定戦であると意識していた。ついにその結果、鈴鹿に、4対3で勝ったのである。この時点で大半の選手や応援の学生達は、もう優勝が決まったかの喜び様であった。私は中堅で出場し、まさか勝てるとは思っていなかった相手を、ここ一番の気力と周囲に陣取った仲間の盛大なる声援により内またで見事に「一本勝ち」をした。

そんな零囲気の中で私は「この鈴鹿戦で勝ったのだから他の高専にも勝って、必ず優勝してやる。」と心に決め、「喜んでいるばかりではいられない。」と次の豊田・岐阜・鳥羽戦に備えて一層心を引き締めた。恐らく私以外の三人の五年生の選手も、最後の高専大会なので必ず優勝してやるという気持でいっぱいだったと思う。

第二試合の豊田戦では、3対3の引き分けであったが一本勝ちが沼津の方が多く、結局私達の勝ちとなった。次の岐阜・鳥羽戦には何なく勝った。新めて団体戦の全試合が終了したところで肩の荷が降りたというか、やっと目標をつかんだという気持が込み上げてきた。自分はどうしていいのかわからず、とりあえず、みんなに混じって大騒ぎして喜んだ。

次の日は個人戦であった。前日団体戦で優勝したので、今日も頑張っていこうという気であったが、どうしたわけか昨日ほど気合が入らなかった。結果は、軽量級で五年生の山縣君が二位、三年生の秋山君が三位、中量級で五年生の石原君が三位、重量級で私が三位であった。山縣君は昨年も個人軽量級で二位で雪辱を期待していたのだが、本人は相当悔しかったと思う。この個人戦は、結局鈴鹿高専が圧倒的な強さをみせつけた。このことによって沼津には、そんな目立って強い選手はいないのに団体戦で優勝できたのは、応援学生、先生方が一丸となって試合に臨んだたまものであることを改めて知った。

またその日の午後、下級生中心の勝抜戦が行われた。下級生中心の勝抜戦であるが、鈴鹿高専が圧倒的な強さで勝った。しかし本校も、三位に入っており、将来に期待がもてる。

私達はこの東海大会に向け、毎日の練習に全員参加して、部員の間にいい雰囲気を作り、優勝を目指して頑張ってきた。昔はともかく、私が高専に入学し柔道部に入ってからのことを考えてもこの一年は、結構厳しい練習の日日であったと思う。下級生諸君にとっては、あるいは地獄の苦しみであったかもしれない。しかし、その練習に耐えたからこそ東海地区で優勝できたと思う。

その後、全国大会への出場権を競う、東海北陸代表決定戦が七月二一日、富山市で行われる。私達はその間五日間余り学校で練習をした。みんな沼津に帰ってきてやっと優勝の実感がわいてきたのか、つい東海大会についての話に夢中になりいささか練習に厳しさが足りなかったように思う。そのようなみんなを私は止めることもできなかったことがくやまれる。とにかく、勝つにせよ負けるにせよやってみなければわからないと腹を決めて、試合に出発する日を待った。

北陸の代表は、富山高専であった。昨年全国大会二位という強豪である。「たぶん負けるだろう。」という弱気が、みんなの心の中に浸透してしまったように思う。結果は、4対0で完敗であった。ついに、全国大会に出場することができなかった。富山高専は全国大会でも圧倒的な強さを見せ優勝したという。私は東海大会でせっかく優勝したのに、全国大会に参加できないということが口惜しかった。また同時に勝負の世界は厳しいということを新ためて知らされたように思う。

来年こそは、という気持ちがおこったが、残念ながら私はすでに五年生であり、卒業である。全ては後輩に期待するしかありません。夏休みも終り、新生柔道部は、幸い私達五年生が心配するほどのこともなく、毎日練習にはげんでいる。今後、私も暇をみつけて練習へ出るつもりです。先輩方も、暇がありましたら是非顔を出してご指導をお願いします。

体操部

C5年生　大嶽譲治

今年（昭和59年7月）、体操部は、私が入部して、三度めの優勝をした。大会出場校はたったの三校（鈴鹿、豊田、沼津）という、小規模な大会ではあるが…。しかし、この優勝をいれると、私の在部5年間の間に3回もその栄冠を勝ちとっている。

我校に多々あるクラブの中では、割と弱小（規模、知名度などの点で）の部類に入る体操部としては、一つの存在感を感じさせる成績であると思う。私自身、これらの優勝に関して、それほどの貢献をしたとは思えないが、それでも、この最終学年5年生、部長として、優勝できたことは、一つの記念でもあり、そしてまた、誇りでもある。卒業していかれた数々の諸先輩方にも安心してもらえる体操部を残せると思っている。幸い、現在の部員たちは非常に真面目で、日々練習に励んでいる。確かにその人数は、あいかわらず少ないのはいなめないが、昔よりは少し多くなってきている。2ケタ、つまり、10人台の部員数を、保持している。中学時代からの体操経験者も多くなり、これからは、その技術のレベルアップも期待できそうな状況である。新入部員も、私の入部した時の様に、たった一人などではなく、今年は、5人ほど入部した。

私が2年生になる時、体操部は、重大な危機にさらされた。部員の数が少なすぎて、同好会になってしまうのでは……などと、うわさが飛びかったのである。確かに、そう言われても仕方がないほど、その活動は、地味だったし、その部員数も、数人を数えるのみであった。しかし、運のいいことに、その年、一年生が、数人入部し、かろうじてそのクラブとしての、体面を保った。

なんだか、情けない話になってきたので、今、現在のことに話をもどす。

こんな、小さい体操部ではあるが、私は好きである。部員も、楽しい人間ばかりだし、その雰囲気も、先輩後輩の上下関係のないアットホームなものだ。

ここで私事ですが…。

顧問の浦崎、望月両先生、それからコーチの山口さん、有難うございました。

そして最後に…。

松島君、芹沢君、杉山さん、八郷君、伊藤君、、そして、雄ちゃん、瀬戸君、トクミツ君、村松君、土井君、ナベちゃん、さらに新入2年生のX君、がんばってください。

バレーボール部

M5年生　籾山澄男君

7月14・15日、鈴鹿にて行なわれた第22回東海地区高専大会の第1戦の相手は、沼津高専がこの数年来、2桁の得点をしたことがない豊田高専であった。第1セットは落したが第2、第3セットは合計2時間近く試合をし、競り勝った。第2セット中盤、4年生が足を吊るというアクシデントに見舞われた。彼は足が言うことをきかず、立つこともできなかったが、来年の新チームの部長にふさわしく、「絶対に負けるものか！」という闘争心であふれていた。急きょ交代した4年生は言うまでもなく、コートの6人、ベンチそして応援団と、全員が「勝つ」気持ちで一つになった。その後の対鳥羽、岐阜、鈴鹿戦は第1試合の余勢でチームワークも最高で、3試合ともセット数2－0と勝ち進み遂に16年ぶりの優勝と共に東海・北陸代表決定戦への出場権を得た。。

7月21日、富山で行なわれた代表決定戦では、長旅の疲れもあったが石川高専とセット数2－0で破り東海・北陸代表の座を獲得した。

8月1日より8日まで夏休み返上で合宿を行ない、さらにチーム力の強化を計った。そして9日第19回全国大会の行なわれる和歌山県にのりこんだ。予選リーグ第1試合は地元和歌山高専と当たりセット数2－0で楽勝したが、第2試合の北九州高専にセット数0－2で惜しくも敗れ「沼津旋風」もついに力尽きた。

が、ここに沼津高専バレー部の黄金時代がスタートした!!

試合結果を下記に記す。

東海大会（於鈴鹿）

沼津 2 (11－15, 15－11, 15－9) 1 豊田，沼津 2 (15－3, 15－6) 0 鳥羽

沼津 2 (15－9, 15－8) 0 岐阜，沼津 2 (15－5, 15－8) 0 鈴鹿

東海・北陸決定戦（於富山）

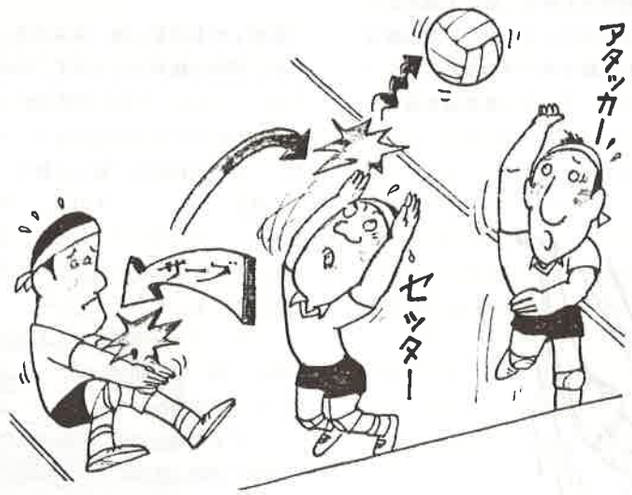
沼津 2 (15－5, 15－11) 0 石川

全国大会（於和歌山）

予選リーグ

沼津 2 (15－5, 15－0) 0 和歌山

沼津 0 (3－15, 9－15) 2 北九州



慶　弔　報　告

中村恒男君を思う

M3　岡本　惇

（加　藤）

その年の正月、いつもながらの賀状の中に中村君のそれもあった。彼は几帳面な性格で、毎年多色刷りの版画で私を楽しませてくれて居たのに、その年に限って黒一色を使った、どちらかと去うと粗雑な版画の賀状であった。はからずもその年、中村君病死の連絡が届いた時、手紙の一通も出しておけば良かった、と後悔をした。

サッカー部の仲間として、18年近い付き合いの間、最近は賀状の交換程度ではあった。やがてはお互いの子供達も巣立ち、社会に於いて最も忙しく動き回る時期も過ぎた頃、又昔のようにじっくりと話し合える事を楽しみにして居たのだが……。

サッカーの練習開始の合図が、彼のトイレに行く合図でもあり、その日の腹具合によって練習への遅刻時間の多少が決った。サッカーパンツの境い目に当然目立つ筈の日焼けの跡が、全く認められぬ程、黒く逞ましい肌の持ち主でもあった。尻の格好が悪いだの、黒ちゃんだのと云われても、一向に頓着せず、名前だけの主将であった私の陰に廻り、クラブ内を実に良くまとめてくれて居た。

私達もいずれは、生と決別し、やがて人から忘れ去られてゆく現実を前に、機会ある度に、精一杯彼の事を思い出す事が、彼への供養であろうと思い、つたない筆をとらせて戴きました。

中川　勝君の死を悼む

M6　羽田壽夫

昭和59年9月26日午後2時、機械科六期生中川勝君が板橋区帝京大学病院において、一ケ月に及ぶ、全力をあげての治療もむなしく、静かに息を引き取りました。

享年三十三歳、千葉県館山市生まれ。高専卒業後は日立プラント建設ＫＫに入社、学生時代バスケットボールで培ったガッツをもって精力的に仕事をこなし、日本中を飛び回っていた彼を思い出すにつけ、今もって信じ難い思いです。

例年になく暑かったこの夏もようやく終わりをつげようとする頃、彼はまるで悪魔に魅入られたかのように、荒川大橋から身を投じました。家庭にも恵まれ、仕事においても充実した生活を送っていた彼にとって、死ぬ理由など何一つなかったはずなのに。

正に『魔がさした』とはこういうことを言うのでしょうか。それにしてもあまりに悲惨な現実をどう受けとめたらいいのでしょうか。

学生時代の中川君はバスケットボールに没頭していました。プレーヤーとして、そして名マネージャーとして活躍し、卒業後十年以上経た最近まで、しばしば母校を訪れては後輩達の面倒を見る熱心なＯＢでもありました。

そして彼の愛したもう一つのものは〝大空〟でした。学生時代、彼の下宿の書棚には教科書そっちのけで航空、宇宙関係の書籍が占領していました。彼の空への憧れは相当なもので、忘れもしないのは高専四年生の時の工場見学で東京、横浜方面へ行った時のことです。

彼は突然、ボーイング747が見たいと言い出し、羽田の当時の東京国際空港まで私を含めて四～五人で見学に行ったのです。ところが今度は「見ているだけでは飛行機の良さはわからない。」と言い出し、飛行機に乗る、それだけのために、とうとう私達は大阪空港行きの搭乗券を買うはめになったのです。

ジャンボではなかったけれど、私達にとって初めてのわずか四十分間の空の旅は、大変すばらしいものでした。あれこれと説明する中川君の得意満面な顔が今も心に残ります。

そして旅のあとに待っていた極度の金欠病と担任の矢吹教官の大目玉とともに忘れ得ぬ思い出となりました。

あまりに突然の出来事に、古い友人の一人としてなすすべもなく、ただやるせない思いでいっぱいです。

今は、残された愛妻和代さんと二人の子供達（空への思いを込めて名付けた航之介君五歳と洵平君二歳）が強く生きてくれることを願わずにはいられません。

中川君の永遠のフライトが安らかなものでありますよう、心から冥福を祈ります。

昭和59年10月14日

富田先生の思い出

C9　中　瀬　道　行

8月10日に富田先生が亡くなられたのを知ったのは、9月に入ってからでした。まだまだお元気だと思っていたのに突然の知らせで、驚きとともに深い悲しみ、寂しさを感じずにはいられませんでした。

私が先生に初めてお会いしてから、約10年の歳月が流れました。その間、公私にわたってお世話になっており、そのつきない思い出について振り返ってみようと思います。

高専に入学してすぐの一年の時に、先生はケムス化学実験を担当されました。その時に「化学実習とは何ぞや？」「実験レポートとは何ぞや？」の手ほどきをしていただきました。すぐに英語を使いたがり「……aqueous solution」が印象的でした。

専門科目においては有機工業化学、触媒化学等を教えていただき、授業中の先生は御専門とされる分野では非常に熱心に講義をなされ、厳しかった印象があります。また、五年の時には、私達クラスの担任として就職・進学に尽力していただきました。

そして、私達の卒業と同時に沼津高専を定年退官されて、その後は東海大学において教鞭をとっておられました。

先生は私達の卒業と一緒に沼津高専を退官なされたせいか、私達クラスのことは先生にとっても、特に思い出多いものだったのではなかったかと思います。昨年3月に私達C9の同窓会を開いた時にも、真っ先に駆け付けて下さり、酒を酌み交わしながら高専時代のこと、或いは御自身の趣味である歌、絵画の話を非常に楽しそうになさっておられました。

ところで私事になりますが、私達夫婦は高専時代の同級生であったこともありまして、先生には結婚式に来ていただきました。私達の結婚のことを知らせるととても喜んでくれて「是非、呼んで下さいヨ」と言って、微笑んでいらしたお顔が、今でも目に浮かびます。結婚式では、私達の門出にあたって素晴らしい歌を御披露してくださり、それは今でも先生の自筆の色紙として飾っております。

「ひとすじに　愛と数との糸もちて
　いとうるわしく　とわに織りなさむ　　彰」

この歌とともに先生のことは、いつまでも忘れることはないでしょう。

富田先生の御冥福をお祈りいたします。

編　集　後　記

今回の原稿は「近況報告」ということで、会員のみなさまにお願いしました。

原稿の締切りが多少おくれましたが、無事発行できましたのも、寄稿して下さった方々、同窓生、教職員の御協力のおかげであります。お礼申しあげます。

なお、原稿依頼の際、当方の不手際で、郵送料が不足し、大変御迷惑をおかけしました。この紙面を借りてお詫びいたします。

本誌の内容、あるいは今後の会誌発行についての御意見がございましたら、同窓会までお寄せください。

同窓会名簿　20周年記念誌

残りわずかとなりました、未だ購入されておられない方は早めに申込み下さい。

申込み締切　昭和60年3月

同窓会誌　第10号

昭和60年2月20　発行

発行責任者　　柘　植　宗　康

発　行　所　沼津工業高等専門学校同窓会
〒410　沼津市大岡3600
TEL〈0559〉　21—2700
郵便振替口座　東京2-102151

印　刷　所　ジャパンコミュニケーション
〒410　沼津市東熊堂650
マルトモVS3F
TEL〈0559〉　23—0123